

古史傳

自第六十七段
至第七十三段

十五

				和書門
		二〇	二六	
二	五	三	一	
冊	架	函	號	類

庫文閣内			
			和書類
二〇	二六		
一四	二二	七一	
函	冊	架	

内閣文庫	
番號	和 20261
冊數	22 (15)
函號	140 183



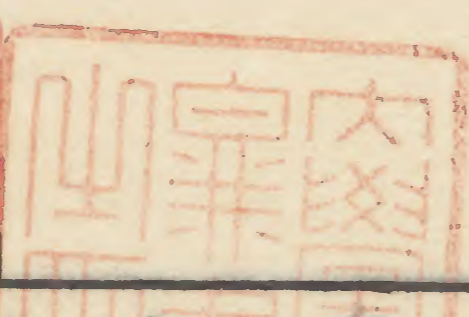
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





古史傳十五出卷

神代中七出卷

平篤胤謹撰

男 鐵胤

孫 延胤

續攷

淺草文庫

爾其子五十猛神。亦云伊太祁

屋毘。初天降出時。多將樹種而

下坐矣。雖然不殖韓地。盡持歸

○古史傳十五

一

而始自筑紫島而大八洲出圀

内悉播殖而成青山矣所以稱

五十猛神而謂有功出神即坐

木圀大神是也此神出妹大屋

津比賣命亦云大屋次ツギニツマツヒ爪津比

賣命亦分布木種矣故此二柱

神亦奉渡於木圀即木圀造出

齋祠神等也五十猛神亦謂韓

神曾富理神此者坐宮内省神

也

五十猛神。おて舊訓ふ從て。伊曾多祁流と訓はし。八十建
例もはと伊多祁流とも訓べきり。日本紀よ伊と云ふよ
多あり。亦名を伊太祁。荒び建び給ふ由の御名お也。○伊
曾と云ふも思ふべし。荒び建び給ふ由の御名お也。○伊
太祁曾神。御名義。出雲。因仁多郡よ。伊我多氣神社あり。此
を杵築大社記ふ。伊我多氣大明神也。五十猛神是れ也と
有也。然れど伊を嚴イカの省語ツギゴトあるり。太祁は猛曾タケソは熊曾也
曾と同じく。此も建きをいふ語れ也。第八段熊曾因の下
曾を佐乎の切キりみて。五十猛有功神イサカお非ざる。見るべし。又若くも
ウ。おち此御名此事也。師説も有り。下よ注はし。○大屋
毘古神。おれ神やぐて禍津日神ふて。亦名を大綾津日神
也。も申して。綾アヤとて禍ウガの義おゆの。大綾也。阿字省て大屋

と云ふ。委く下第二十七段の傳。ふ註はし。○初天降之時と也。サキニアモリマセルトキニ
前小須佐之男命と共に降坐する時を云ふ也。○多將樹種サハニモチコダネラ
而下坐也。纂疏。樹種可樹藝草木之種子也。とあり。然も
有はし。諸穀物の種。諸菜此種。諸菓物の種。また桑麻おど
其。おち多かるべし。皆樹藝交てて。得有まじき物
ども也。天上れゆ種く。此木種を將下也。給へる由あり。抑木
草は。因土の成まると共ふ。蘆桃おど此如く。希ヒふ生ある
もあれど。多くを稚産靈神ワカムスビノの産靈。はと其御子豊宇氣毘
賣神。此奇魂木神野神。此産靈ふ成出ある中よ。止事お也。
本草の種を悉く天御因ツよ有れむを。此時將降モチクダらして殖
給へゆと也。世ふ無て。叶を燃種く。の本草也。生茂れる事

を知られぬ也。大凡世に無て叶てぬ本草を皆皇國に生
ひおと能てば、葉を用ふ本草家あど云倫もあわ知、
しおぞ思ふも有るまど今まで此方におれき物と思へ
依も次くふいと數出來れど能く探して遂ふて無て
叶てぬ物ども遺おく出來べど思ひるまど何の道も
かく開けたるふ合せてを醫藥の方此みいほ古風此
開々ざ依豪傑たる人の出來てよく其道を明免とら
むよて今まで用ゑ依蕃此藥中よ其渡らばとも事欠
ざる物もあつと出來はし但しかく言ふとて蕃國
此物を忌み用ひてと云ふて非也然るは皇神とちの御
心の要と為たる御定免の外國くたり貢奉らし終て皇
あり其を神功皇后卷お委く云べし。○不殖韓地盡持歸
韓地とは西あ依國を總て云予也。不殖持歸とをか此
國くと。淖沫の凝成れ依國ある故直とくお生藝ては
要を成ざる本草どもは生茂依まじき土性ある事を知

看して持歸せ給へ依成はし。天壁立極み廻坐る事をも
む。けて外國くお多うる本草どもは。此後お大汝小汝神
此彼國を造營給ふ時お土性よ相應ふはき本草ど
もを殖布し給するも有はく。はと二柱神の國巡せ給予
依時お出雲國多禰里お稻種の墮と依事。此事を第九十
まゑ西戎國おても神農と云ける王此時お天と粟此
降と依を殖付多ゆやも。云ひ傳ふ依事れどのあるお合
せて思予也。天津神の種を降し賜ひらむも知はうらひ。
今も種々の種此空より降る事。時々ある事あり大凡
西あ國くお生依水草どもは直朴あらぬ中お木を
惡固く希お堅のらぬ木も有依を甚もろくて良材あら
交其を唐木とて渡り來る木ハ多く彼國くの家作よ用

ひとる古材あるを其木質を見て悪木ある事を知べし
奇南香紫檀黒檀イヌおど云木ども小けき器械おどお
作りてこそ珍しくも見ゆれ案を
何の要とも有らぬ木ども也りし
○筑紫嶋を上下出と
見第八段神代口訣ふ肥前国西南沖有五十猛嶋と云
其は此時御坐せる地おどよや神名式ふ筑前国御笠郡
筑紫神社名神大と何る社の祭神を五十猛神おゆと貝原
氏の和爾雅お見えとめ此嶋を事始たて大八嶋の国
内悉く樹種を生し給子れむ此處おも御霊を鎮ふはき
事ぞかし此社の起て筑後国風土記よ昔荒ぶる神有て
多お人を殺し給ひしうば其神を人命尽神と
云々るを後お祝祭りて筑紫神と申去と何り是筑紫を
いふ国名の起お正此をさむり此有功を此を正始給
子ゆみ其社おれき事を御怒ゆ坐ての態あるべし餘神
神おも例ある事ありさて此社を清和天皇紀貞観元年

正月授從五位下筑紫神從四位下と見え陽成天皇紀元
慶三年六月授從四位下筑紫神從四位上と何正今も御
笠郡筑紫村の内原田村の北ある林中の高き処お南向
お坐せり筑後肥前ま近き処おりとぞ第八段筑紫の下
まお第七十四段竈神お
処おも注ふを見べし
○成青山矣は前お須佐之男命
お枯山お泣枯し給子依山くを悉お舊の如くお木種
を播殖て青山と成給へる由お正○稱お多く倍と訓は
し○有功之神を今本おイサヲレ師の伊佐遠能神を訓
まお依子從ふはし江家の点お云を加とる本サ然るは類
聚国史お伊佐乎之久と見え日本紀竟宴歌お伊佐袁志
久正し死道のおむりしは云くおど有る故る伊佐袁志
を云を體語と心得ぬ依も有げおまぞ志を用のし云ふ

詞ふて。伊佐袁と云ぞ本語ありける。其は同竟宴歌よ。得
天、穗日命、草木みお言止ととて葦原の。因字立ふし夷装
鳴あべりぬ。と詠て。其語書此中ふ。こあいたくあまの布
ひれこあぞ。これ。うみのいさをれぬ。云くと有也。此を日
本紀よ。
命曰、天、穗日、命、是、神之傑也。云々とある文を仮字ふ書と
る。ふて、いさをれぬ。を、傑也。ふ當れぬ。古訓よ。然ぞ有け
む。を、今、本、ふ、を、傑也。と訓。是を以て、伊佐袁能神と訓べき
あり。こを後の訓ふ。を。由を辨ふ。を、言、義を、勇、雄あらむ。紀中、功、字を、イ、然るふ
サ、三、を、も、訓、也。
伊佐袁といふ語を。功、字、德、字、れ、ど、の、義、と、思、ひ、打、任、せ、て
然言む。こを。義を、違、字、れ、ど。既ふ有、功、字、を、伊、佐、袁、と、も、伊
佐、袁、之、と、も、體、言、ふ、訓、來、お、ま、む。功、德、あ、ど、此、字、を、と、り、訓

むも。今を非とは云かぬし。○坐木、因、大神是也。木、因、は、名、
義、此、字、の、如、し。紀、伊、と、書、を、必、二、字、お、定、む、は、し、と、の、御、制、
ふ、因、て、紀、音、の、韻、此、伊、を、添、と、る、あり、此、例、
多、右、此、如、く、木、種、を、分、播、る、ふ、神、の、坐、に、故、ふ、木、因、と、を
名、け、し、あり。神名式ふ。紀、伊、因、名、草、郡、伊、太、祁、曾、神、社。名、神、
大、月、
次、相、嘗、と、ある、大神、是、あり。文、德、天、皇、紀、よ。嘉、祥、三、年、十、月、
新、嘗、
紀、伊、因、伊、太、祁、曾、神、從、五、位、下、と、見、え。清、和、天、皇、紀、よ。貞、觀、
元、年、正、月、從、五、位、下、伊、太、祁、曾、神、從、四、位、下、陽、成、天、皇、紀、よ。
元、慶、七、年、十、二、月、伊、太、祁、曾、神、從、四、位、上、あ、ど、有、也。當、因、の、
神、名、帳、
正、一、位、勲、八、等、伊、太、祁、曾、大、神、と、見、也。因、史、後、の、書、等、よ、
諸、因、の、神、等、よ、一、階、お、上、給、り、る、お、や、數、々、有、き、を、遂、お、
正、一、位、お、上、り、給、ひ、ぬ、む、と、然、も、有、は、し、さ、て、此、社、は、南、
紀、名、勝、志、了、東、庄、伊、太、祁、曾、村、の、西、北、一、里、許、お、り、和、銅、

正平承久明應年中の繪旨あり其内和銅を紛失矣延元
の奉書郡日前因懸宮と有て祭神を天兒屋命孫石凝姥と
見也れど信がとし第四十五段の傳見合去べしさて扶
桑略記より延喜六年四月七日授紀伊國從五位下伊太祁
曾明神從五位下とあるを誤り師云伊太祁曾の曾を
契沖の魯字の誤あらむと云し然も功神と云ふは佐
れどおち思ふに曾とぬるあり故因史まじ和名抄に
乎を切むま曾とぬるあり故因史まじ和名抄に
もみお曾とありまじ因人も然云り但し因人の祁を伎
と云ぬる ○此神之妹大屋津比賣命 亦云大屋
おは妹を
は有れど眞の妹了非矣はと御妻おも非矣決然て速秋
津比古神は妹速秋津比賣神と同類よて五十猛神の分
身あらむと思也 風神志那都比古神の次小志那都比賣
賣神おち此外おも同じ 其を五十猛神やがて大福津日
例の神等いと數多あり

神ふて亦名殘瀨織津比賣神とも申して女神おも坐は
し大綾津日神とも申せば大屋津を大綾津の阿を省
はる也 師説よ杖の用を舍宅を造るを主と云る故は
ぬ五十猛神を大屋毘古神とも申はふ此女神をまじ大
屋毘賣神と申は字思ひ合せて辨ふべし 凡て等き神等
と思ふは女神ありあり女神ありと思ふは男神あり
也まじ一柱ありと思ふは二柱三柱も身を分ち二柱
三柱お坐坐神の一柱お身合給ふもありまじ男神は
あて分身は女神ありあり女神おして分身の男神あり
何也此等の事どもを第廿五段第六十四段 侍て和名抄
第百廿七段おぞみ次考へ記去字見べし 侍て和名抄
ふ名草郡お大屋郷あはる此神の御名を正ぞ出はむ ○
梳津比賣命御名義いまど思得也 師説よ此を材よとれ
る御名あり梳字を四

方木也。と字書に見ゆ。万葉。哥。眞木。さく。檜の。孺。乎。と。所。此。あり。然。る。ふ。扱。と。作。る。を。寫。誤。あり。と。あれ。と。説。得。ら。れ。し。や。も。○分布は。上。小。播。殖。と。い。ふ。文。何。也。其。を。受。て。示。所。思。之。○此。も。麻。伎。宇。惠。を。訓。ば。し。本。小。分。布。と。訓。み。師。と。有。ま。ば。此。も。麻。伎。宇。惠。を。訓。ば。し。本。小。分。布。と。訓。み。師。も。共。に。惡。○此。二。柱。神。示。奉。渡。於。木。圍。之。五。十。猛。神。と。三。神。共。小。木。種。を。分。布。し。給。子。る。故。小。木。圍。小。遷。渡。し。奉。れ。依。由。あ。也。神。名。式。小。名。草。郡。伊。太。祁。曾。神。社。小。並。ば。て。大。屋。都。比。賣。神。社。名。神。大。月。都。麻。都。比。賣。神。社。名。神。大。月。と。何。也。右。三。本。一。所。小。坐。し。よ。や。文。武。天。皇。紀。一。大。室。二。年。二。月。分。近。伊。太。祁。曾。大。屋。都。比。賣。都。麻。都。比。賣。三。神。社。と。あり。和。名。抄。小。名。草。郡。小。大。屋。津。麻。伊。太。祁。曾。あ。と。い。ふ。郷。名。あり。御。紀。小。嘉。祥。三。年。十。月。紀。伊。圍。大。屋。津。姫。神。都。摩。都。比。賣。神。從。五。位。下。貞。觀。元。年。正。月。從。五。

位。下。大。屋。都。比。賣。神。都。麻。都。比。賣。神。從。四。位。下。あ。ぞ。あ。也。南。紀。名。勝。志。小。大。屋。都。比。賣。神。社。小。平。田。庄。宇。田。森。村。の。東。北。一。丁。許。小。大。屋。大。明。神。あり。當。國。の。神。名。帳。小。從。一。位。大。屋。大。神。と。何。り。都。麻。都。比。賣。神。社。は。名。勝。志。小。山。東。吉。礼。村。中。小。あ。也。と。見。え。當。國。の。神。名。帳。小。從。一。位。上。都。麻。都。比。賣。大。神。ま。と。妻。之。御。前。社。小。山。東。庄。平。尾。村。の。中。小。あ。也。土。人。相。傳。子。て。此。神。を。伊。太。祁。曾。神。の。妻。あ。る。よ。依。て。神。事。を。伊。太。祁。曾。社。の。社。人。勤。む。と。云。へ。り。ま。と。或。説。小。杣。津。姫。と。云。也。此。社。あり。吉。礼。村。あ。る。を。扱。あ。し。と。云。へ。り。考。證。了。は。今。在。吉。礼。村。と。あ。也。さ。て。從。一。位。ち。て。此。三。柱。神。を。何。處。と。誰。上。せ。あ。る。一。字。ハ。四。の。誤。り。ち。て。此。三。柱。神。を。何。處。と。誰。り。木。圍。小。遷。渡。し。奉。れ。依。と。考。ふ。依。小。須。佐。之。男。命。は。出。雲。國。小。御。坐。せ。る。よ。彼。神。小。屬。て。坐。せ。る。神。等。あ。ま。む。共。小。出。雲。國。小。坐。け。む。と。決。あ。し。斯。有。は。師。説。の。如。く。須。佐。之。男。命。の。彼。國。と。也。渡。奉。也。給。子。依。也。也。師。説。小。出。雲。と。木。圍。と。同。く。通。子。る。事。多。

し。まが熊野てふ地、名二国ふあり。まご意宇、郡速玉、神社、
牟婁、郡熊野、速玉、神社、まご意宇、郡韓、国伊達、神社、名草、郡
伊達、神社、大原、郡加多、神社、名草、郡加太、神社、おれらみあ
同名、れ也。此、皆右の三、神、れ、出雲、国、を、遷、り、渡、り、坐、し、時
の、由、縁、ある、べし。奉、渡、り、奉、り、給、ふ、あり、と、あ、り、神、名、式、出、雲、
神、を、出、雲、国、を、り、渡、り、奉、り、給、ふ、あり、と、あ、り、神、名、式、出、雲、
国、意、宇、郡、ふ。韓、国、伊、太、氏、神、社、。此、を、玉、作、湯、神、社、の、同、社、ふ
た、伊、達、ふ、作、る、と、云、へ、り、師、の、上、ふ、引、れ、と、る、も、伊、達、と
有、ま、バ、然、依、本、も、有、る、ふ、お、そ、韓、国、と、し、も、冠、と、る、を、韓
お、渡、り、て、帰、り、坐、依、神、お、ま、む、お、り、其、を、豊、前、国、田、川、郡、ふ、
辛、国、息、長、大、姫、神、社、と、云、あ、り、此、を、息、長、足、比、賣、命、の、韓、を
伐、て、帰、り、坐、る、由、を、も、て、辛、国、云、く、と、白、ひ、と、聞、お、る、を、も
思、ひ、合、ま、す、べし、ま、ご、大、隅、国、贈、答、郡、ふ。韓、国、宇、豆、峯、神、社、と
い、ふ、あ、り、此、も、韓、子、由、ある、神、。は、ご、韓、国、伊、太、氏、神、社、。此、を、
あ、る、事、を、言、ま、く、も、更、お、り、神、。は、ご、韓、国、伊、太、氏、神、社、。此、を、
神、社、の、同、社、。は、ご、韓、国、伊、太、氏、神、社、。此、を、佐、久、多、神、社、。出、雲、
郡、ふ。韓、国、伊、太、氏、神、社、。お、て、阿、須、伎、神、社、。ま、ご、韓、国、伊、太、氏、
の、同、社、神、お、り、神、社、。ま、ご、韓、国、伊、太、氏、

神、社、。お、て、出、雲、神、社、の、。は、ご、韓、国、伊、太、氏、神、社、。こ、を、曾、枳、能
社、お、坐、。同、社、お、坐、せ、り、。は、ご、韓、国、伊、太、氏、神、社、の、同、
社、お、坐、。此、等、み、お、伊、太、祁、曾、神、を、祭、れ、る、社、。其、は、韓、国、と
を、彼、国、を、廻、り、給、り、る、ふ、由、あり、伊、太、氏、は、伊、太、祁、を、通
ひ、て、聞、お、れ、ば、れ、り、。谷、川、氏、も、早、く、韓、国、伊、太、氏、神、社、。は、ご
神、名、式、ふ。紀、伊、国、名、草、郡、ふ。伊、達、神、社、。名、神、と、ある、も、同、神
此、社、と、聞、え、和、名、抄、ふ。同、郡、ふ。伊、太、郷、あり、此、社、を、国、史、ふ。
承、和、十、一、年、十、一、月、奉、投、紀、伊、国、從、五、位、下、伊、達、神、正、五、位
下、嘉、祥、二、年、十、月、紀、伊、国、伊、達、神、加、從、四、位、下、貞、觀、元、年、正
月、奉、投、紀、伊、国、從、四、位、下、伊、達、神、正、四、位、上、同、十、七、年、十、月、
紀、伊、国、正、四、位、上、伊、達、神、授、從、三、位、お、と、見、也、。南、紀、名、勝、志、
の、園、部、村、の、

東よ園部神社と云あり是ありと云ずり。和まよ式よ伊
名抄よ苑部郷を云何也。今の園部村ある。まよ式よ伊
豆、因賀茂郡よ伊太氏和氣神社。を何依も同神り。此社を
仁壽二年十二月加伊豆、因伊太豆和氣神、從五位上、伊
豆、因本駿河とあり。今一本よ依れり。伊太豆の豆、字一
本氏と何也。まよと齊衡元年六月加伊、其を同郡よ杉梓別
豆、因伊太豆和氣神、從五位上、とあり。其を同郡よ杉梓別
神社と云何也。此を伊豆誌よ五十猛神を記る由見えれ
むれ也。伊豆志云當郡田中村よ木宮明神あり。五十猛命
守あり。慶長の札よ木野大明神とあり。祠傍に樟樹十三
抱許あり。膽八此大樹二株あり。末社よ小鳥と云あり。當
社を伊豆納符の中よも出と也。まよ同郡八幡村よ木
宮明神あり。大見十六村の總鎮守あり。正保二年此棟札
よ貞和中藤原朝臣祐義公新宮殿造立とあり。まよ那賀
郡熱海村よ木宮明神あり。此を五十猛神と稱。終と
あ陸奥、因色麻郡よ伊達神社。名神と何るも同神を依也。

色麻郡と和名抄よも出て其郡よ色麻之加万
老志よ今作四寛為加見郡邑とあり。さて今伊達郡と云
を延喜式和名抄拾芥抄あぞ見え。環翠軒の節用集
よ見とり。此を後よ此社名。其は播磨、因筋磨郡よも射楯
よと也。建とる郡と通也。兵主神社二座。を何依社の祭神を。五十猛神と。須佐之男
命を也と物よ見え。陸奥、播磨ともよ郡を志加麻といふ
をり。陸奥へを移しとり。んむ當國の名所。因會といふ物
よ。此社を辻井村と云よあり。まよ行矢此神を。も云今を
姫路の總社よ合せ祭る。舊を八疊岩よ坐せしあり。此社
と云り。あ不此兵主神社の事ハ別よ委く云べし。此社
よ並、傍て白、因神社といふ有也。あを彼新羅を也。渡坐る
よ由何也と聞ゆるも。思合さ依まはあ也。白、因を斯良伎
良伎やがて斯良、因をいふ語ある由を既よ云ずり。き此
社のおと因史よ元慶二年六月授播磨、因從五位上白、因

神正五位下、ト見えとゆ ○木圀造之齋祠神等也。木圀造を産巢日神
此御子。天御食持命亦名手置の裔也。宮作此業を掌れ
ゆ故。木圀名草郡に住み。遂に圀造と任まじ事。上り委
く注す也。第五十段木圀忌部の下見るべし 凡て某く此圀地に坐す神等
をば。其所くを治る圀造とち。天皇の大御手より代す也。齋
祠る古の御制あり事也。既上り注す也。第三十九段の
○五十猛神を韓神と申は義を。韓圀伊太氏神とも申は
如く。蕃圀くよ渡す也。還す給すれを稱す。曾富理神を
申は義を。皇美麻命の天浮橋より蘓理發して。天降坐る山
此名を曾褒里山といふ。須佐之男命。五十猛神の埴を

舟よ作りて。渡坐るとを合せて思ふ。皇美麻命此乗せ
ゆ浮橋を。まよ磐船をも云ひて。此事を第百三十七段よ
其を虚空を乗すて往來する物あれむ。五十猛神の乗て
渡坐る埴舟といふも。同物也。其より蘓理發して。渡著給
すゆ故。曾富理神といふ御名を負坐るよ也。師も言れ
居曾尸茂梨之處を。曾尸茂梨も由有げあれど。尸茂
の富と切まる由も無れむ。思ひ合せ難し。然まむ上の考
ふ。從て有べし。お不思ひ合はせ。事は石見。圀迹摩郡磯
竹村の内。大浦と云ふ地を。須佐之男命の還り渡す坐る
地ありと云傳す。大屋村といふ地。唐神明社と云
あ。祭神を。須佐之男命と云ふ。まよ其里。五十猛神社
ゆ。毎年此十月よ海上より。唐神明社の前。坐れち
大浦よ。白蛇の上ること。違はぬ。此を桐箱よ納まて。神前
よ奉る。あよ杵築浦。や日御崎とよ上る物と同じ。大屋村
の隣村を。静間村といふ。此より式内静間神社あり。志都岩

屋もあふの浦ありと其圀ある門人霹靂神社の神主竹
内正芳の語べき須佐之男命の還渡ませる地を上に出
ゑる如く出雲圀安來郷あるを石見圀と云傳ふる事を
いかゞあまど共隣界の圀れまむかくも云ひ傳ふけ
む事然も有_レ佐_ノあ_ハ下_ニ註_スふを合せ見る_レ佐_ノ○宮内省
は和名抄ふ美夜乃宇知乃都加佐と何まど乃宇を切_ル終
て美夜奴知能都加佐と訓べし職員令ふ宮内省管職一
今云大膳寮四今云木工大炊主殿司十三今云正親内膳
職をいふ寮四典藥の四寮をいふ司十三造酒鍛右官奴
園池土工采女主水主油内掃部卿一人掌出納司之出納
也諸圀調雜物春米官田_謂供御稻田分置_置織及奏宣御食
産_謂奏者官田園池當年所佃種色目并收穫多少及氷室
諸方口味_謂除調雜物外諸事_謂大輔一人少輔一人大丞一

人少丞二人大録一人少録二人史生十人省掌二人使部
六十人直丁四人と何_レ宮内省式と合せ見て其掌_ノ趣
を_レ知_ル佐_ノ次_ノく_レ嚴重_ノ定_マれ_ルた_レ孝德_ノ天皇_ノ御代_ノを_レ
ど考_レ德_ノ天皇_ノを_レり_テ以前_ノも_レ宮内省_ノとい_フ名_ノこそ_レ無_レれ_カ
加_ル職_ノ掌_ノの有_ルむ_レ事_ノを_レ開_レ題_ノ記_ス委_スく_レ論_スへ_ルを_レ見_ルべ_シ
八省_ノ此_ノ中_ノ此_ノ省_ノば_ハウ_レ被_レ管_スの_レ諸_ノ司_ノ此_ノ多_ク也_ノ形_ノし_テ神_ノ名
式_ノ小_ノ宮_ノ内_ノ省_ノ坐_ス神_ノ三_ノ座_ノ並_ニ名_ノ神_ノ大_ノ園_ノ神_ノ社_ノ韓_ノ神_ノ社_ノ二_ノ座_ノと_レ何_レ
也_ノ圀_ノ史_ノ子_ノ齊_ノ衡_ノ元_ノ年_ノ三_ノ月_ノ園_ノ神_ノ韓_ノ神_ノ竝_ニ加_レ從_ス三_ノ位_ノ同_ニ二_ノ年_ノ九
月_ノ以_テ園_ノ韓_ノ神_ノ列_ス官_ノ社_ノ貞_ノ觀_ノ元_ノ年_ノ正_ノ月_ノ宮_ノ内_ノ省_ノ從_ス三_ノ位_ノ園_ノ韓_ノ神_ノ
竝_ニ正_ノ三_ノ位_ノあ_ハど_レ見_ル也_ノ御_ノ祭_ノを_レ二_ノ月_ノと_レ十二_ノ月_ノと_レの_レ丑_ノ日_ノふ_レ園_ノ
後_ノ丑_ノ冬_ノ新_ノ嘗_ノ祭_ノ前_ノ日_ノと_レ式_ノを_レ見_ル也_ノ神_ノ祇_ノ官_ノ人_ノ祭_ノ此_ノ事_ノを_レ預_ル也_ノ
上_ノ御_ノ辨_ノ内_ノ侍_ノあ_ハぞ_レ参_リ勤_ムる_レこ_レを_レ貞_ノ觀_ノ儀_ノ式_ノ延_ス喜_ス四_ノ時_ノ祭

式西宮記北山抄江次第あ
ど其外の書等小見えと正。此を宮中イキマツ小齋祠イキマツに給へ依事
は。内侍所御神樂式よ。韓神之事。素盞雄尊子也。有帝基安
泰之誓。故宮中祭之と有れど。何れ御世といふ事知れら
らび。然れど令を御撰ありし始と正を猶舊くるべき事
御子とあるふ。此式よ。素盞雄命の御子とある事いと珍
考子て韓神曾富理神と申は。江家次第此頭書ふ。件神
五十猛神あ依事を辨ふべし。延曆以前坐此遷都之時遣官使欲奉遷他所神託宣云。猶
座此處奉護帝王云く仍鎮座宮内省とあり。然れど宮内
省小坐ひ事と成しは。延曆小都を遷されし程をゆ此事
あ正なり。古事談五卷よも園韓神社モリ本自坐大内跡而遷
都之時造宮之使等可移他所云く干時託宣云

猶坐此處奉護帝王云く仍坐
宮内省内云くと見えと正。ちて園神の事は大倭神社
注進狀小大神氏家牒曰。園神舊記云。件神者守疫神也。傳
聞大己貴命之和魂大物主神也。案此神園華飛散之時發
園神カ園ノ殖ノ神ノ木ノ之ノ處ノ也。集解所と見え。韓神二座の事也。
謂三枝和靈祭云當社之事也。と見え。韓神二座の事也。
太宗祕府畧記小韓神者伊猛命號韓神曾保利神とあり依
小從ふべし。あの祕府畧記の文伊字の下の曾字を脱せ
十猛を伊太祁流と訓む證とあり。然て己が五十
猛と訓とるを誤り。さて文此意を宮内省小坐ひ韓神
を申は。伊猛命を韓神とも曾富利神とも申は。其二名
を二座を祭と依由と通也。一神此兩名あるを二座と志
て。社の祭の由の豊の石の窓の櫛の石の窓の神の進の狀の小韓神者大
有の貴の命の少の彦の名の命の也。兩神經營天下為頭見蒼生則定其療
病の之の方の或抄云大己貴命少彦名命神記曰昔造葦原中圀

訖去往東海今為濟民更亦來痛因以号兩神云韓神欽古
語外因云韓也と云へるも然る説も聞ゆまともお不祕
府畧記の説は扱はくぞ所思也依諸ま師説ふ神名式
ふ伊勢因度會郡園相神社あり此を或書ふ曾富理神曾
奈比く古命大歳神于也と云るハ園相字ふ付ての園
神を思ひとせと依例の推あてりもと言れと依る如し
ちて神樂譜ふ韓神といふ歌の正其歌ふ本見志方由不
三島木綿よて伊豆因三島より出る木綿加太仁止利加
あるべし賦役今ふ東木綿と依る是り加太仁止利加
介肩ふ取挂りて禱和禮可良加見乃我韓神之ふて韓神
さて此可良加見と依る依て韓神を可良加美と訓
法しと云へ依る有れぞ加茂翁の言は如くはた哥詞の
調ふ依て乃を畧れ難し加良乎支世武也韓招せむ哉
れむ訓の例とを畧し難し加良乎支世武也と云るあり
御神樂式み加良於幾座置也とあるを加茂
大人此神遊考み論をまざる如く非あり加良乎支世
牟也言句ふ定ゆれく且末の句をか末也比良天乎ハ葉
返し哥ふこと古哥此常あり

あり大嘗祭式み葉天耳止利毛知天手み取持和禮可良
盤比良氏と有あり加見乃本の哥ふ注加良乎支世武哉加良乎支世牟也と
の正此二首は韓招を空招禱をかけて言す依ふて招禱
言の意を既み第四我は三嶋木綿を掛け八葉盤を取持
十四段み委く云正我は三嶋木綿を掛け八葉盤を取持
ち捧げて神招禱を依を決て禱ふ驗あらせむ空招禱
は爲じ我を韓神の如く韓招は爲じと云ひ挂と依る正
然まバ此神は韓招を神といふ古傳のゐるふ本抄き
て詠免る歌と通えぬ正躰源抄私云から字死を枯と
る萩を云よや清暑堂の御神樂
此試樂執柄家おて行を依時人長枯とる萩此枝を持
事あり是祕藏の事ありと云へ正按ふ此をのら字ぎ
と云ふ語は付て時よやり後拾遺集み資長朝臣藏人お
ての景物了持とるふや

古語の有りむ事知れし。凡そ仲哀天皇卷ふ委く注を見るべし。まといふ園、神此事を言はる。上ふ引ゑる大神氏家牒ふ。大物主神子坐て。疫病を鎮止給ふ由云。依て。案ふ然るべし。大神氏て大物主神の御末あまむ。其は此神物主と爲て。万れ鬼正き扱ありてぞ記しむ。神を治給給ふば。大宮中ふ。然依邪鬼の入依を禁給て。む爲ふ祭られむ。一、己と理を立て言をむるハ、韓神園と序次べき。園韓とある。殊も此大神も。依と蕃園を招て。大皇固も寄給ふ事を掌給へむれ也。此を崇神天皇卷ふ注ふを見と。亦此大神の事委く。第九十五段。第百二十八段。此傳れど。注ふを見て知れし。抄ふ。大治二年三月十四日。園韓神社。神祇官八神殿。并内

外院門垣等焼込云く。園神韓神御正體奉取出之。但後日兼俊宿禰云。八神園韓神自元無御正體。但園韓神有神寶。劔梓云く。まゑ長秋記了。大治四年三月廿一日。參院仰曰。去夜本院御夢想。有老人稱宮内省住人申云。近日居住近邊。雜人等亂入甚難堪也。此事可令訪語也。今朝被尋之處。被園并韓神二社入夢驚申歟。件社焼込後。未突四面垣。仍雜人等亂入とあり。はと園大曆文和四年十一月十九日。天陰園韓神祭社壇顛倒。其後無沙汰。五節又同日無沙汰。見也。康富記ふ。應永廿六年二月五日。大風園韓神御社顛倒ともあり。朝野群載ふ。此社預卜部宿禰兼宗社の修造を請申せる解状もあり。

爾健速須佐出男命。到坐出雲

囿簸出川上在鳥上出地時箸

從其河流下矣。於是須佐出男

命。於其河上以爲人有而覓上

往者。河上有啼哭聲矣。故尋其

聲而往上者。老夫與老女二人

在而中置童女而撫出泣也。問

給汝等者誰耶。則其老夫答曰

吾者囿神。大山津見神出子也。

吾名謂足名椎。妻名手名椎。女

ナハマガミフルクシナダヒメトトマヲシキ
名。眞髮觸奇稻田比賣也白矣。

マタトヒタヘイマシノナクユエハイカニゾトバマヲス
復問汝出哭由者何歟則答白

アガムスメハヨリモトアリヤヲトメキコニコ
我女者自本在八稚女矣爾高

シノヤマタヲロチナモゴトニトシキテクフ
志出八俣遠呂智出。每年來喫

ナルイマソレベキキヌトキナルガユエニナクトトヒタヘソノ
焉。今其可來時出故泣。問給其

カタチハイカサマニカトバマヲシケラクソレガメハナシアカ
形者如何歟則答白。彼目如赤

カガチテミヒトツニアリカシラヤツヲヤツマタ
加賀智而身一有八頭八尾。亦

ソノミニカヒコケマタヒスギソノナガサワタリタニヤ
其身。生蘿及檜杉。其長度谿八

タニヲヤヲニテミレソノハラヲバコトクニイツモチアエ
谷峽八尾而見其腹則悉常血

タミレタリトマヲシキカレハヤスサノヲノミコトニ
爛也白矣。爾速須佐出男命。於

ソノオキナ。コレイミレノムスメナラバタテマツラムニアレ
其老父。是汝出女則立奉於吾

ヤトノリタマフニマヲセドカレケレズトシラミナラバ
哉詔出。答白。雖恐不覺御名則

アハアマテラスオホミカミノイロセナリ
吾者。天照大御神出伊呂勢也。

カレイマヨリアメクダリマシツトコタヘタマヒキコニアシ
故今自天降坐也。答出矣。爾足

ナツチテナツチノカミマラレシカマサバカレシニク
名推手名推神。白然坐則恐隨

三コトノタテマツラムトキ
勅立奉矣。

籙之師云地名あり。和名抄ふ。出雲国大原郡斐伊。今本伊
を甲と

誤を。彼国風土記ふ。大原郡斐伊郷。屬郡家。榊速日子命坐

此處。故云榊神龜三年改字斐伊とあり。是をゆ河ふも名

け於依れり。榊速日子命也。即上小見とる榊速日神あり。

は籙の川上よて大蛇を切給へ依由よて須佐之男命を

申けり。又大蛇の靈を祭れるるあり。師説を信ぐ

今云神名式ふ。同郡子斐伊神社。此を清和天皇紀より貞

五位下。同十三年十一月。授從五位下。斐伊神。從五位上。と見ゆ。同社坐斐伊波夜比古神
社と竝とす。此を風土記ふ。榊社。榊社と竝て。在神祇官

之云る社あり。抄抄。斐伊郷宮崎大明神也と云り。此は樋社二社の中。下丸

依之。式式。斐伊波夜比古神と云。師の引れぬ依斐伊郷の

文文も。樋速日子命坐之。何まば。祭神知らまぬ依を。上あ

る樋社を祭神詳あらば。然れども式式。武藏国足立郡武藏国足立郡。

氷川神社氷川神社。名神大月とある社の祭神を。一宮記一宮記。素戔嗚

命と何命。今も其本宮を去り言傳言傳。予ぬゆ。はと男體宮と

も云ふ。此社此社。國史國史。貞觀元年正月。武藏国武藏国。從五位下。氷

川神川神。正五位下。同七年十二月。武藏国武藏国。氷川神氷川神。從四位下。同

十一年十一月。授武藏国武藏国。從四位下。氷川神氷川神。正四位上。元慶

二年十二月。授正四位下。氷川神氷川神。正四位上。あど見。此国此国の

也。今も中山道中山道。ある大宮大宮。駅の傍傍。大社大社。みて在在。此国此国の

国造国造。神代紀神代紀。天穗日命天穗日命。出雲臣出雲臣。武藏国武藏国。造等造等。祖也祖也。と見

え。国造本紀国造本紀。成務天皇成務天皇。此御世此御世。定賜定賜。予る由見えて。式

小。此国此国。横見郡横見郡。伊波比神社伊波比神社。男衾郡男衾郡。出雲乃伊波比

神社神社。まま。入間郡入間郡。も。中氷川神社中氷川神社。出雲伊波比神社出雲伊波比神社。あど

何何。姓氏録姓氏録。入間入間。宿禰宿禰。天穗日命天穗日命。之。此等此等。みれ。出雲国出雲国。小

由ある社由ある社。通通。も依之。出雲国出雲国。造造。ゆゆ。派派。て。此国此国。造造。と成

ま依故ま依故。祝祝。予依社予依社。あるはく。覺覺。も依依。就就。て。氷川神社氷川神社。も。

彼樋社彼樋社。を移移。せるれらむと思はま。氷川神社氷川神社。の素戔嗚尊素戔嗚尊

あ依あ依。就就。て。其本社其本社。とる樋社樋社。をも。疑疑。ああ。く。此神此神。あらむと

覺覺。もるれ。征征。之時之時。勸請勸請。素戔嗚尊素戔嗚尊。也也。と云と云。り。素戔嗚尊素戔嗚尊。を

勸請勸請。と云と云。然依然依。説説。あまを。日本武等日本武等。東征東征。之時之時。と云と云。る。を

信信。がが。とと。し。まま。とと。後後。のの。惣惣。国国。風風。土土。記記。小。孝昭天皇孝昭天皇。三年三年。所祭所祭。素

蓋鳴等大己貴命奇稻田比咩合三座也と云るを殊も信
られ其延喜式の御撰有し比まて一一座ありし故に神
名帳より其座数を記され然るも今三座ありハ惣固
風土記を記せる程より此事は然り也然るも稲田比咩命を聞
べ式外あること云も更に正然り也當社男躰宮の大祝岩井氏
也れど大己貴命を漫説あり當社男躰宮の稲田比咩命
ふ傳を依古文文章より男躰宮素盞鳴等女躰宮稻田姫命
火王子宮と何るを扶桑見聞私記と云物よ建久八年
四月お將軍當社お参詣ありし事を記して神此由緒を
尋られしお神主申云大己貴命ありし出雲大社を勸請し
奉る故お大宮と号ひ此神むうし出雲氷川上お宮居
し給へる故お氷川明神と申奉ると云る由見と正おハ
妄言多お書おまむ一向おは信ぐとけまむ若家あらむ
大己貴命と云るは其神主の故実お聞きありし然らば
式お一座おれハ男躰宮おそ本社おれ女躰宮火王
子宮は案は式外の末社おまむ又按ふお火王子と云神と
因ふおは社より驚しおくおらび又按ふお火王子と云神と
富士の末社より有て詳おらび聞おれども此お斐伊社
神此王子と云意おて即須らび聞おれども此お斐伊社
佐之男命此御子おらむハ川上お師云加波乃弁と訓

此を加波加美と訓法し其故を同風土記にお出雲大川源
自伯耆與出雲二国堺鳥上山流出仁多郡横田村即經横
田三處二澤布勢等四郷出大原郡堺引沼村即經來次斐
伊屋代神原等四郷出出雲郡堺多義村經河内出雲二郷
北流更折西流即經伊努杵築二郷入神門水海此則所謂
斐伊河下也云々自河口至河上横田村之間五郡百姓便
河而居門水海お流石仁多大原郡○此大河の下古を神
正流變りて今お伊努郷より東方より流て固中此入海お
入とおおはちて此入海を固中を東より西より遠く入る
海よて昔を津海ありしを肥大河の流入る故よまお仁
その河水よ衝れて今を津入らお淡海ありとぞ
多郡室原川源出郡家東南卅五里鳥上山北流所謂斐伊

皇卷小海人乎。因已物而泣也。おぞろ也。泣雀鴨泣耳師所

哭哭者泣友おど。いと多く見也。○老夫を意伎那と訓はし。和名抄小翁

孫恠切韻云。老人也。和名於岐奈やあ也。比止耆宿布流於

木奈とも見也。日本紀云。老公老。は。於伎を息。那を長ふて。命長き人を云ふ稱ある事。既ふ

第十段。注るぐ如し。○老女は。師云。意美那と訓はし。新撰

字鏡小娘於彌奈と何也。娘を字書し見えは。字の躰を思

續紀十三了。紀。朝臣意美那と云ふ婦人。此名も見也。抑老

女を意美那と云は。少きを袁美那と云を對ひて。大々小

を。或以て。老や少とを別て。依稱お也。那美あどの御名此

例を思ふ。意伎那。意美那。伎と美と。或以て。男女を別て。稱あるべし。して和名抄よ。説文

云。嫗。老女之稱也。和名於無奈と見え。日本紀云。老婆。老婆

老女。かの続紀十三。依紀。朝臣意美那をも。同紀五ふ。日記。おきおむ奈と云るも。老夫。老女の意。は。と万葉

小。嫗。靈異記。嫗。於那。おぞ見え。と依。中。古。々。ゆ。ち。て。美を音便。小。牟。とも。宇。とも。云。れ。せ。る。物。お。也。是。ま。と。袁。美

那。字。も。後。よ。を。袁。牟。那。や。母。袁。宇。那。とも。云。と。同。例。お。也。と。意。衰。と。を。以。て。老。少。を。別。於。こ。と。は。祖。父。母。を。意。知。意。婆。や。云。ひ。親。の。兄。弟。を。衰。知。衰。婆。や。云。類。あり。然。る。小。後。世。意。衰。の。仮。字。乱。ま。て。り。是。ら。衰。法。て。分。れ。お。ゆ。よ。と。也。又。師。を。万。葉。子。抄。あ。と。て。老。女。を。於。與。那。と。訓。は。し。和。名。抄。於。無。奈。も。無。と。與。の。誤。お。ら。む。云。を。於。れ。ど。心。得。○。童。女。は。衰。凡。て。於。與。那。と。云。お。と。物。子。見。え。と。る。事。お。し。

師云袁登賣と訓はし。袁登賣のおと上小見也。女と書る
ていまだ成長らぬと聞ゆまぜ下は御合ませ書紀ふ。
る事あれむあくもむげよいとさかたふハ非じ書紀ふ。
少女幼女幼婦万葉六ふ。渾童女あど見え。和名抄よ。小女。
和名乎止米童女同上とも有まむ。童あ依字も袁登賣を
云ふ也。まど和名抄よ童女女乃和良倍書紀五ふ童女と
の郷名よ童女を書て。まど宇那章とも訓はし。万葉十六
乎無奈と云るも有り。
ふ童女波奈理和名抄人倫部。老幼ふ。髻髪和名宇奈爲あ
ど有まむ也。髪を以て称ぶこと。総角目刺あどの○中
置而は。中爾須惠氏と訓べし。兒居て守る山辺うらと有
○撫之泣也。加伎那傳氏泣那理と訓むはし。古事記了

は。多泣と何依を記傳ふ。泣那理と訓て言れしは。此那
理也。古文の辭はひ字能知らむ人。わきま子てむ。下の
喫を久布那流を訓るも同じ。凡てかゝる那理那流を見
死よ添る辞ありあくを老夫老女のうへ字須佐之男命
の見とるふ方と云言下の喫を遠呂智ぐう字老夫れ
見る方と云言あり。此辞中古の物語文あども常
多うれどあぶざむ見。師云是を多曾と訓むをわろし。誰
耶也。多禮曾を訓はし。を於乃我を和汝を那を云例よ多
礼を多と云むを然依事あれ○吾者也。阿波と訓は
し。凡て自称と死の吾字我字僕字あどを夜都加礼と訓
は。人せをかりて此文も有る。夜都加礼と訓
さる言あし。阿礼於能礼と云し。夜都加礼と訓
と云語の意を清寧天皇卷ふ出たり。其処に云へし。○因
神。おは大山津見神よ係して聞ゆまぜも。書紀ふ。吾是因

神號脚摩乳と見えはと吾圀神名猿田毘古大神也。まよ
吾圀神名井冰鹿あどある例ふ依れむ。自稱ふあ也。さき
よて姑くちて圀神やむ。師云。高天原ふ坐神を天神と申
讀絶べし。此圀ある神を云ふ也。神祇令義解子別とる
ひふ對子て。此圀ある神を云ふ也。天神地祇を疑ひあり
但し何事も此圀ふて言ふとれ依故。天神とは申せざ
も。圀神とは徒^タは言^ハひ。卷首よ五柱天神を尤別天神と
七代神を尤あ神世七代と云。圀神とを。あ^ク天神ふ對
て。圀神世とハ云。是をの意ぞ。圀神とを。あ^ク天神ふ對
ふとれれみ云稱ふ也。此も天を^ア降來坐る神子對ひて
申言あり。右よ引る猿田毘古大神も然也。まよ迹く藝命
ぞの意ありの詔ふ。必^ニ圀神之子とあるも。天神の御子あら
まむれり。○大山津見神を上ふ出と也。第十六段○足名

椎手名椎は。師云。奇稻田比賣を撫愛しみある由れ名よ
て。足撫豆知手撫豆知の約也。依れあ也。傳豆を切むちま
ば是を。比賣也。須佐之男命此御妃よ爲給ひて後ふ御親
を思ひて稱しものぞ。然らざれば子を愛みある由也。本
む今此よ吾名とて各告あるを前後違ふ小似とれと然ら
て後を以多始子も同らし言ハ古傳の常あまば妨あし凡
ちて足と手やを分て。父母ふ當あ依よは意あし。石根拆
とを分て。石拆神根拆神と云如く。足手撫と云こを分
て。負とるのみれり。但し足以て父よ負とるハ古は手足
ぞは云をで。足手とぞ云ハむ今も。椎を借字ふて。野椎あ
足手纏あどを。足を先よ云れり。
どの如く。某豆知と云例あまよ有て。上第十三段野椎ふ
云依如く。豆は之ふ通ふ辭。知を稱名れ也。書紀よ摩乳と
書る文字ふ泥

みて、知を乳養の意とひるを、例字も考子に、古言、躰をも
知らぬ、辟説、乳り、乳養を乳とのみ云て、聞えむ物り、ま
と父よ、乳養を以、○妻名、女名、上、此、老女は妻、乳、童女
て名、む物り、○妻名、女名、上、此、老女は妻、乳、童女
は女、おと申せ、依言、無れど、自、ら、妻子と知、依、故、
直、お、如此、を申せる、乳、○真、髪、觸、奇、稻、田、比、賣、
比賣とあるを、今、を、真、髪、觸、奇、と云む、發、語、を、
書紀、一書、お、扱、れり、
を稱、とる言、櫛は、髪、觸、る物、を、ま、む、如此、冠、らしむ、彼、薦
枕、高、皇、産、靈、神、天、疎、向、津、比、賣、命、お、の、如、く、神、名、も、發
語、を、れ、く、は、上、代、の、文、此、状、乳、師、云、奇、は、美、稱、を、
櫛、八、玉、神、櫛、石、窓、神、櫛、御、方、命、お、ど、猶、多、か、
此、如、く、地、名、乳、
其、由、下、
故、徒、お、稻、田、比、賣、と、も、有、
然

依、を、久、志、と、り、連、く、故、お、志、お、伊、の、響、有、て、お、此、扱、の、ら、那
陀、を、云、依、ま、ば、名、田、と、も、有、お、
猶、下、
見、依、べ、し、
久、志、伊、奈、太、伎、比、咩、神、社、あ、
本、師、云、お、常、お、固、を、云、と、を、聊、異、お、し、て、俗、言、お、元、來、と
云、意、お、り、
○八、稚、女、を、師、云、夜、衰、登、賣、と、訓、べ、し、
ハ、箇、少、女、と、書、
ハ、お、例、の、多、死、を、云、依、ま、て、
し、意、お、る、
白、袴、原、宮、段、お、七、媛、女、日、代、
宮、段、お、二、嬢、女、お、ど、も、
れ、る、
此、方、此、古、書、を、通、用、ひ、
お、
和、名、抄、お、出、雲、因、神、門、郡、古、志、と、
風、土、記、お、古、志、郷、即、屬、郡、家、伊、弉、那、彌、命、之、時、以、日、淵、河、築

造池之爾時古志因人等到來而爲堤即宿居之處也故云
古志也。まと同郡狹結驛古志因佐與布云人來居之故云
最邑其所以來居者說如古志鄉也。何也。内山眞龍云日
て池を造りし時、越因人佐与布等來りて堤を築き、即
宿れりし処、ちまき越因の名を取て、神門郡、古志郷、あ
ま、と其人の名を取て、郡、母理郷の傳、よ、大穴持命、越
ゆ、來、宿、れる、故、を、意、守、郡、母、理、郷、の、傳、よ、大、穴、持、命、越、因、と、
因、を、平、て、還、坐、へ、る、と、記、し、古、事、記、に、八、千、矛、神、高、志、因、此、沼
河、比、賣、を、婚、給、へ、る、と、記、し、古、事、記、に、八、千、矛、神、高、志、因、此、沼
越、人、の、出、雲、矛、上、ま、依、由、を、明、か、す、越、後、因、給、ひ、し、因、此、沼
頸、城、郡、子、沼、川、郷、奴、奈、川、神、社、も、あ、り、出、雲、風、土、記、抄、に、古
志、郡、家、者、從、今、弘、法、寺、六、町、西、北、田、疇、俗、呼、言、郷、所、蓋、是、也、
并、古、志、芦、波、知、井、宮、等、以、爲、一、郷、又、云、日、淵、河、者、蓋、芦、波、与
知、井、宮、之、境、俗、呼、云、保、知、石、川、と、云、ひ、古、志、郷、以、保、知、石、大
明、神、爲、氏、神、此、社、者、在、佐、知、石、谷、寬、永、年、中、迂、祀、古、志、村、中
栗、皮、塚、田、淹、之、園、山、是、則、伊、佐、那、美、命、也、と、も、云、へ、り、古、志、
郡、家、を、通、度、ぐ、文、子、依、る、よ、神、門、川、の、東、よ、有、り、今、の、河、流

を變とる。○八俣遠呂智。師云八俣之と之を添て訓て
もの。○八俣遠呂智。師云八俣之と之を添て訓て
あど此処。八俣。次小身一有八頭八尾と云る是
云。云。如。八。書。紀。一。頭。遠。呂。智。は。書。紀。小。大。蛇。を。書。也。和。名
尾。各。有。八。岐。と。あ。也。遠。呂。智。は。書。紀。小。大。蛇。を。書。也。和。名
抄。小。蛇。和。名。倍。美。一。云。久。日本。紀。私。記。云。乎。呂。知。と。何。ゆ。師
今。俗。了。た。小。く。尋。常。ある。を。久。知。奈。波。と。云。ひ。や。大。ある
を。幣。毘。と。云。ひ。お。不。大。れ。依。字。宇。波。婆。美。を。い。ひ。極。矣。て。大
ぬ。る。多。蛇。を。云。れ。也。遠。呂。智。と。俗。名。義。青。呂。智。と。ふ。言。の
小。蛇。と。云。ば。の。り。ある。を。ぞ。云。ん。む。名。義。青。呂。智。と。ふ。言。の
阿。の。省。か。也。依。小。也。師。云。尾。於。村。呂。智。よ。て。尾。の。根。ぞ。ろ
を。棘。驚。く。お。ぎ。同。言。か。め。け。て。其。於。た。遠。此。韻。よ。あ。依。故
了。省。驚。く。お。ぎ。同。言。か。め。け。て。其。於。た。遠。此。韻。よ。あ。依。故
き。靈。劍。を。尾。中。小。し。も。含。持。ま。ば。其。威。靈。お。て。餘。所。を。上。あ
尾。を。殊。み。い。う。め。え。く。お。せ。ろ。し。威。靈。お。て。餘。所。を。上。あ
て。名。小。負。せ。し。お。ら。む。と。説。ま。ら。る。理。青。呂。智。と。を。俗。小。青
た。然。も。と。聞。也。ま。ど。猶。然。も。説。ま。ら。る。理。青。呂。智。と。を。俗。小。青

野呂智ノロチ云蛇ヘビ了ハシて。此を青呂智といふ国クニく多オホシうれむカ也ナリ。其ソノ尋常ソコトも倍ツヨク毘ヒと云イハばウ也ナリ。物モノをりリ大蛇オホヘビと云イハばウ加カ国クニ大山オホヤマ辺ヘの人ヒトあアどドも然シカ稱ナリふフを聞キこコりリ猶ナあアらラ云イハすス相摸サウモうウるルべベしシ出羽デフ国クニ此コノ秋田アキタ庄シラ内ウチ辺ヘにニてテ青アヲ蛇ヘビろロちチと云イハすス。江エ戸トあアどドもモてテ抑ソク蛇ヘビの類ルビ多オホシうウ依ヨ中ナカにニ也ナリ。此コノ蛇ヘビをヲしシもモ常ツヨク小コ草クサ村ムラの中ナカにニ在アるルもモ。餘ホカ蛇ヘビ等トモとトゆユはハ平穩ヘイオンも長ナガクくク也ナリ。人ヒト小コ害ガイをヲ爲ナすスあアやヤめメ。餘ホカ蛇ヘビ等トモ此コノ如スくク酷クしシのノらラびビと云イハすス。かカくク穩ツヨクもモ老オホ成ナリげゲあアるル故ユにニ云イハすス然シカまマどドもモあアらラずズ也ナリ。大オホ小コあアるルをヲ知チくク。俗ソコト小コ宇波婆美ウハハミをヲ云イハすス。大オホ蛇ヘビと云イハすス。蛇ヘビの有アるル状カタチをヲ探ウツ依ヨりリ皆ツあアらラずズ。此コノ蛇ヘビの大小オホコト成ナれるルもモ。其ソノ餘ホカ蛇ヘビ此コノ状カタチをヲ知チるルもモ。聞キこコるルべベしシ。大オホ小コ依ヨ性セイの物モノをヲ氣キづクかカらラ自オノかカらラ小コ蛇ヘビの

時トキにニ也ナリ。然シカしシもモ害ガイをヲ爲ナすス。老オホ成ナリるル依ヨ事コトと思オモはハるル也ナリ。俗ソコト宇波婆美ウハハミと云イハすス。常ツヨク陸リク下ゲ総ソウあアらラずズ。人ヒトをヲ哀アハれレ加カ婆美ハハミと云イハすス。出羽デフの秋田アキタあアらラずズ。宇波婆美ウハハミといイふフ。其ソノ於オこコにニ加カ美ミとト同ドウじジうウるル。彼カノ高タカ龍リウ神カミの御末ミマツあアらラずズ。思オモはハるル。由ユあアらラずズ。下ゲにニ注ツふフをヲ見ミるル。然シカしシもモ袁エン呂リョをヲ青アヲ小コ呂リョてテふフ辭ハジメ此コノ添ソゆユとト依ヨるル。阿アの省シヤウ也ナリ。多オホシうウるル語コトバ。智チはハ師シ説セツ此コノ如スくク。例レイの稱ナリ名ナをヲ知チるル也ナリ。下ゲにニ須ス佐サ之ノ男ヲ命メ也ナリ。御ミ言コトすス。汝ニ可カ畏カシ神カミ也ナリ。とト詔ミコトすス。まマとト欽キ明メイ天テン皇スミ。卷マキよヨ。狼オオカミをヲ也ナリ。貴キ神カミと云イハすス。虎コをヲ威カシ神カミと云イハすス。言コトをヲ知チるル如スくク。加カらラ依ヨるル物モノ字ジもモ稱ナリすス。智チと云イハすス。知チるル也ナリ。蛟カウあアらラずズ。智チもモ同ドウじジにニあアらラずズ。思オモはハるル也ナリ。○來キ喫キツ焉ナ。伎キ氏シ久ク布フ那ナ流リウとト訓ツケはハるル。師シ云イハすス。出雲イツノ風フウ土ツチ記キすス。神カミ門カド郡クニ小コ來キ食シキ池チと云イハすス。何ナニれレ由ユにニてテ名ナをヲ知チるル也ナリ。

同じきほくし引出於○今云こち高志郷と同じ神門郡を
れむ遠呂智の來て契りる由の名あらむも知べりら
周、一里一百四十歩との依池あり内山眞龍を來食え久
久比と訓はし鶴あり垂仁紀よ譽津別皇子見鶴得言云
云鳥取連祖天湯河板拳遠望鶴飛之方追尋詣出雲○今
而捕獲云く此事此所由ある池あるべしとい予也
其師云其とは上の遠呂智を指て云ふ古言なり云漢文
を格異 ○赤加賀智古事記本注ふ今酸醬也や有り書紀
ぬれ ○赤加賀智と書て此云和名抄ふ兼名苑云酸醬一名洛和名
赤酸醬と書て此云和名抄ふ兼名苑云酸醬一名洛和名
保く都岐やあり師説ふ名意は赤赫都窠もて都美を切
て智と云ぬ也字鏡ふ酸醬加我彌吾又奴加豆支と有り
加我彌を赫窠あり和名抄ふ蟬蛇夜万加を言れと也然
まぞ今此現ふ山加賀智も赤加賀智とも云て赤黃斑

あるぐ腹を殊も赤く目は血を沃多依如く赤蛇蛇有也
赤赫智の義あるはさて此を凡て青呂智とを異りて
かしよく強氣き物あるぐ又いと大なるも有也云へ也
此ふ依て按ふよ古事記の本文此意は青呂智此目は赤
加賀智とい蛇蛇此如く血走也と云意の古傳あり
んむを名此同じ蛇故ふ酸漿此事ぞや心得て今酸醬也
や云註字加あるよを非じう斯むかめ大なる蛇の目此
赤く恐し蛇を譬へ言むふ酸漿は似於うはし有ぬをも
思ふはし越後国蒲原郡小関村ある教子上相篤興が語
の朽とる空ふ年久しく腕の太さむりあ依赤加く知
れ住て時く頭を出け木とあぞ有し童子ども打を
ゆて其空牙あきゆみ木竹を刺入れぬる其蛇遂よ死
てけり斯て其を引出して切散しぬ依り尾ふありと骨

の三四寸許、あるが、鍊より剛く、又折くまで有るを
取て、木竹れど削依よいと能く切らぬ。濡る紙さすを
切るるを、奇しや人も見ぬ。依よ、江戸人の來、相て、そ字買
取りて去れる事あり。後ふ此、古学ふ入て、遠呂知の尾
よ、靈劍の有し事あり。思ふよ、我が買取、ざりし事、此口惜
しと云り。由有げれることあり。○さて序小云、酸漿の
案を保く都岐と云、頬突れ、奴加豆支、額突あり。彼
案、此枝ふ付る状、田く、人、此頬を、おき、額を、突る、如
く見成さ依れ。○八頭八尾は、師云、加茂翁の、加志良夜都
む、云る、あらむ。○袁夜都、訓れ、於るぞ。皇國の物言、れ、依、○蘿を、許、祢、ふ、也。
万葉小多く、此字を書、也。和名抄、小、切韻、云、苔、水、衣、也。亦、作、
落、和名、古、介、と、何、也。蘿を、別、よ、出、して、唐韻、云、蘿、女、蘿、也。雜
要訣、云、松、蘿、一、名、女、蘿、和名、万、都、乃、古、介、と、も、有、れ、と、此、の
蘿を、あ、び、許、祢、よ、用、ひ、と、也。谷、川、氏、云、許、祢、○檜、杉、此、事、は

既、よ、註、へ、也。此、を、書、紀、ふ、也。松、栢、生、於、背、上、と、何、也。和名抄
語抄、云、字、亦、作、榕、和名、萬、都、栢、兼、名、○長、は、師、云、那、賀、佐、と
苑、云、一、名、栢、和名、加、閉、と、い、ふ、也。○長、は、師、云、那、賀、佐、と
訓、考、し、大、き、廣、さ、深、さ、あ、ぞ、云、格、の、辞、を、奈、良、ま、で、ふ、と、正
如此、訓、考、し、大、き、廣、さ、深、さ、あ、ぞ、云、格、の、辞、を、奈、良、ま、で、ふ、と、正
ま、と、本、草、あ、ど、立、る、物、よ、云、こ、と、ぬ、り、蛇、あ、ど、は、横、よ、長、き
物、よ、あ、そ、有、れ、高、く、立、物、よ、は、有、○谿、を、和名、抄、ふ、爾、雅、注、
云、水、出、山、入、川、曰、谿、又、作、溪、和名、多、爾、水、與、谿、相、屬、曰、谷、猶
谿、也、と、何、也。○峽、を、師、云、袁、と、訓、考、き、あ、ぞ、谿、八、谷、の、例、ふ
て、明、し、尾、ふ、此、字、を、書、る、例、也。懿、德、天、皇、紀、よ、曲、峽、宮、神、功
皇、后、紀、よ、活、田、長、峽、國、あ、ど、何、也。峽、を、和名、抄、ふ、峽、山、間、峽、
る、如、く、あ、ま、だ、尾、よ、た、非、炎、但、し、荊、州、記、よ、三、峽、七、百、里、中、
兩、岸、連、山、無、断、處、あ、ど、云、る、彼、山、の、長、く、連、れ、る、さ、は、を、取

て云言あり。此事浮穴宮段。常根津日子伊呂泥命の下よ
委く云はし。考乎てよ。加茂翁説。伊呂の家等よて。万葉
十四。東哥。伊波呂と云る。是れり。
けて同母の子て。母と共よ同家。在る故よ。伊呂母伊呂
兄伊呂弟伊呂姉を云ありとあり。是ぞ古の趣ををく得
られとる物と先ふて思。けて此命は御弟をまとも男命
ひしりぞ非ざりぬ。其由を上ふ云。第十一。段。我。那
れ依故。兄と詔ふあり。其由を上ふ云。第十一。段。我。那
見。上よ天照大御神の大御言よも。我那勢命をあり。第三
十二。段。見。○恐む。師云。訶志許斯と訓はし。下よ。天尾羽張
るべし。神の答ふ。恐之仕奉と見え。はと言代主神の語も。恐之
此因者立奉天神之御子を見え。まぬ穴穗宮段。恐隨大
命奉進おぞあると同じ語格あり。速ふ諾して承る詞あり

也。今世言よ承諾はるを加志許麻理申多と云ひ奉。畏候
仁徳天皇紀播磨速待が哥。伽之古俱等望阿例椰始難
破務とあるよ。とく似る趣あり。加志許久斗毛と訓
べき。やも思乎り。そを賤き女を奉む。○隨勅を書
くともれり。然まども猶前の方ふとる。○隨勅を書
紀小據て補乎。美許登能麻く。邇くと訓べし。立奉於吾
指て云り。○立奉は。師云多氏麻都良牟や訓はし。如此書
依例を。右ふ引る言代主神の言。まぬ木花之佐久夜毘賣
段ふも。立字を添とる故。は。多都とばり。多氏麻都
を獻る。と。麻都流とは。りも獻る。と。多氏麻都
流と云。本其。二を重複ある言あり。は。と。獻依を麻陀須
也。云。は。と。其字多氏麻陀須とも云。は。その多氏も

爾速須佐出男命以其童女取

同じ。今云多氏麻陀須てふ言の師説て第百
四十六段の傳に注せり考へ合はべし。ちて奉字は
多氏麻都流とも訓どもはと常ふ麻都流とはの正ふも
用ふる故ふ。かく立字を添ても書るあ正。獻は多。立とを
う正云。ゆえ。大神宮儀式。六月十七日夜。佐古久志侶伊
須く乃宮仁御食立止云。御食奉る。是れ正。まよ山神乃奉
御調等六よ宮柱太敷奉あぞある此二の訓を誤とえ見
ゆれど奉を多都ともいふ言の有しから古くとりかく
訓るあまど
おれらも一
の證とえ出
ばくあむ

成湯津瓜櫛而刺御美豆良而

告其足名推手名推神曰汝等

以衆菓釀八鹽折出毒酒且作

廻垣於其垣作八門每門結八

佐受伎每其佐受伎各置一口

サカブネヲテゴトニフネモリソノヤシホヲリノサケヲテ
酒槽而每船盛其八鹽折酒而。

テヨマチアレタメニイマシノテムコロシソノヲロチヲト
可待吾爲汝當殺其遠呂智也

ヲレハタマヒキ
教出矣。

湯津爪櫛の事也。上よ既ふ注牙也。第十八段の○取成
は師云下ふ令取其御手即取成立冰亦取成劍刃とある
と同くて此物を變化て彼物よ爲あ也。書紀ふ立化奇稻
田姫爲湯津爪櫛而挿於御髻と書をある化字よて明し。

古來この立化二字をタチナガラと訓るを當らば立一
字をさも訓べしさて化字と下あは爲字とを合せてと
言ふ當れぬ然まは是は比賣の身體を櫛ふ變化て須
佐之男命此已命の御美豆良小刺給ふ也。然るは中古を
稻田姫の處女あるよそひを化て櫛を其髻よさして須
佐之男命此御妻ふし給ふありと云ひ或は須佐之男命
此稻田姫の形よ化て櫛を爲て御髻ふちて如此く爲
さし給ふありと云をみあひが説れ也。給ふ所以はいろ
給ふ所以はいろ給ふ事う知がぬし清輔奥儀抄ふ櫛よ
取成て蛇ふ見せじや爲給ふ依ふや爪櫛よを惡鬼のお
ぢる物よて侍るふこそ同紀よも醜女よ追れて逃るふ
はぢあくて懷く爪櫛をと出て打はく其時醜女追
さして返す然と云は事ありや云也。但しおちて追さし
とめとを見えぬ

如此の由もや有む。○御美豆良を上より出拔第十八段の傳見る

○衆菓は母く呂く能許能美と訓べし。和名抄ふ。漢書

注云木實曰菓日本紀私記云古乃美俗云久太毛乃草實曰蒨和名久佐

あす。○八鹽折を師云書紀ふ。八醞酒と書す。醞釀酒也と

も。久釀也とも。字書に注せす。はと和名抄ふ。説文云。耐三

重釀酒也。漢語抄云豆久利西京雜記云。正旦作酒。八月成

名曰耐酒。一名九醞。通俗文云醞。酒切韻云。醞。酒。今

此を師の引れあるをり。少し委く引とす。さるを再麴

を下去を酸と云ひ。其を曾比と云ふ。此は用有ればあす。

此多夜志本袁理を云ふ所由を私記ふ。或説一度釀熟絞

取其汁棄其糟更用其酒爲汁亦更釀之。如此八度は爲純

醞之酒也。謂之鹽者。以其汁八度絞返故也。今世亦謂一度

便爲一鹽也。謂之折者。以其八度折返故也。是古老之説也

と云す。此説大加と宜のるはし。八度折返とは古何事か

はま。回復て物去依字。折と云るふや。物語文ふ。折返し歌

ふあぢあり。あは折から折節其折彼折あど云折と本同

度字一なり。二なり。と云はと酒折池。酒折宮れど云も何

依を思ふば。折を酒を造るふ。殊に云言あるはし。酒折池

天皇。卷ふ見え。酒折宮を。けり。新撰字鏡ふ。醞志保留と何

は。説文。厚酒也。を注せり。此は依らば。厚酒を造るを

志保留とは云は。依りや。志保留を。即志本袁留の切ます。

る言ふて。幾度も折返し醸意を依はし。云も此と出と
依まるとま物色を染るを、一しや二、志本と
云も本同言よて、其を理を畧る言あらむ。
は。酒を造るよも、其汁を云名ふや有ら奉。津もかの伊邪
色字染依よ。其汁を云名ふや有ら奉。那岐大神此段
ふ塩許袁呂許袁呂迹画成てふ古言よとまむ。疑堅ま
るべき汁の意あり、さて食塩を、津より出とる名ありま
ふ八鹽折之紐小刀と云も何也。其を玉垣宮段ふ云ふは
し。○毒酒を。阿斯伎佐祁を訓はし。舊訓よも 諸の菓を以
て。八鹽折ふ醸とる酒を。外布毒く酔ふはく造也給ひら
む。○醸は師説よ。酒を造るを云。古歌よあまきを見也。字
鏡よ。醸造酒也。佐介加无を注せ也。此加牟を口よて咬咀
臆度のひが言あり、加牟を和名抄よ、麴を加無太知を有
依は加びぬちよて、俗お花の付と云ふれお也、されば酒

も加びだせて作る意よて、加牟と有也。是ぞ正説お
む云ふあり、故加毛須とも云有り。 有也。是ぞ正説お
依。然るふ。日本決釋をいふ物よ。應神天皇之代。百濟人須
曾己利。人名。參來始習造酒之事。以往之世未知醸酒之道。
但殊有造酒之法。口中嚼米吐納木櫃。經日酣酸名之爲醸。
故今世謂醸酒爲嚼。是其法也。今南島人、とあるは、舊き安
所為如此
説と聞えと也。此書を古事記裡書といふ物引とり、日
本決釈日記を也、應永三十一年七月
五日書写の奥書ある書引とれ。あ不酒を造始、依事。
む中くお舊き物よてを有あり。
はと酒よ要何の事ともは。少毘古那神の處よ委く註ふ
はし。第九十三段。○垣を。師云限お也。○作廻を。師云。縣居
翁の作母登本志と訓れぬ依お從ふはし。母登本志を母

登本良志米あ也。母登本留之即廻返あとも也。万葉十九
あ。大殿此此廻の雪あ踏そ祓。ま大殿乃此母等保里此
あど何也。宮段此哥あ出於。と何也。儲あの垣也。何處よ作
れを宣ふ事ぞと按ふるよ。足名椎。手名椎。神此住居此周
あ作まとの事あるはし。然るも大蛇の來るはかあらは
○作八門。此垣此四方よ有ははら。決免て一方あ
竝はて作らし給ひらむ。其は頭こそ八あれ。身は一あ
まむ。一方あ向ひ來る理也あまむ也。○每門結八佐受
伎とは。師云門每あ一あむ。八門あれむ。合せて八結
を云ふ。門每あ八あむ。合せて古文よは此言て。あ此あ

通せと依語多し。能せばも謬れあむ。大祓詞あ天津金木
千座置座よ云く。と云るも打断ての下よ置座よ作りと
云言を省きて。然聞せと依よ同じ。此も每門結。佐受伎。八
門合せて。八佐受伎を云て。ハ言重あ。ちて八稚女。八俣。八
依故よ省き。然聞せあむものぞ。頭。八尾。八谷。八尾。八鹽折。八門。いぢれも慥あ七。八の八あ
を非で。本を多あ。多死を云る語あ也。然るを神道よを八
れど云ふ説也。○佐受伎を。師云書紀よ。作假殿八間。を書
論ふよ足らは。了。假殿此云。佐受積と何也。殿を閣也と字書あ見えはと
所以藏食物とも見也。和名抄あ。類聚固史云。假床此間云。
佐受積。今案假構屋。内床之名也と何也。此等は字あ就て
云牙依此みあ也。佐受伎を。後世あ物見る料よ構ふ依。佐

自伎と云ふ物即ちまきあす。さじ丸を即ちさびきの訛、丸也。書紀、紀ふ今世、棧敷の字を、おしめては作まる物あるを、此字は依てさむじきと唱ふるを、甚く非あり。さじきてふ名を、物語文ふ多く、神功皇后紀、祈狩の處、二王各居假殿、赤猪忽見也。出之登假殿、まと雄略天皇紀、張夫婦、四支於木置假殿、以火燒殺、おぞも見えとす。○一口酒槽、酒槽を佐加夫禰と訓ばし。書紀の古本、和名抄、文選注云、槽、今之酒槽也。和名佐と何也。古事記、酒船と書するを、語一口は比加布禰と何也。比まき書するも、丸し。一口は比登久智也。比登都とも訓ばし。書紀、古本はヒトクチと訓み、今本はヒトツあり。比登久智を訓て解くば、今酒を作する器を槽と有れど、書紀、一書、釀酒八甕と何る。小就て按ふ。いみ

し酒をば加丸らび甕、釀して。其丸がら小居備ふる例、あまむ。此時も、宋を甕、造りむを、槽と何は、槽、釀る、あと始して後、何うまき酒を造る器を、布禰を云ふ、慣ひをぬりて、此の甕をも槽と書る。今も酒を造る器をば、或はて槽と、ちて一口此と云、依を、甕をいふ物の状を、下ふぞ云ある。注ふ如く、口は數あ、依も有し、うば、此を八頭を、八甕、一ちく垂入し、丸むとの御計ある故、口一、ある甕、盛置志、給子、依由ある、凡てかく、依物の數をいふ、漢文口も、その漢文、丸らむくと、比登都を訓むるは、甕を何思ふ、よ、あ、然、よ、は、非、比、登、都、を、訓、む、る、は、甕、を、何、ら、て、信、槽、ふ、て、一、口、は、一、箇、を、漢、文、に、書、る、と、見、依、べ、し。

此^ツ訓^ツ今思^ヒ決^サ絶^ダグ^スぬ^シ。○教^ヲ之^シ矣^キ。衆^ヲ菓^ヲをも^テ。八鹽^ヲ
折^リの毒酒^ヲを釀^ル事^ト也^ニ。遠呂智^ヲを待^ベき構^マまで^ヲを教^ヘ給^フ
牙^ハ由^リ
あ^リ。

於^コ是^ニ足^レ名^ナ推^チ手^テ名^ナ推^チ神^ナ隨^フ教^ヲ言^フ。
設^マ備^ケ而^シ待^ツ出^ト時^ニ其^ハ八^ツ俣^チ遠^ク呂^ク智^ク。
信^コ如^ト言^ト來^リ爾^ハ速^ク須^ク佐^メ出^ス男^ノ命^ヲ勅^ス。

遠^ラ呂^ロ智^チ曰^ク汝^ハ者^ハ可^カ畏^キ神^ナ也^ニ敢^テ不^ス
饗^ア乎^ヤ詔^ト而^シ乃^チ以^テ八^ツ甕^ツ酒^ヲ每^レ口^ニ沃^ス
入^イ出^レ則^チ其^ハ遠^ク呂^ク智^ク每^レ船^ニ垂^テ入^ル頭^ニ
而^テ飲^ム其^ノ酒^ヲ矣^ニ於^コ是^ニ飲^ム醉^リ而^シ留^リ伏^ス
寢^ネ矣^ニ爾^ハ速^ク須^ク佐^メ出^ス男^ノ命^ヲ拔^キ其^ノ御^ヲ

ハカセル トツカツルギヲテ キリハフリタヒソノ ヲ 口 チヲ
佩出十拳劔而切散其遠呂智
シカバヒノカハナリチニテナガレソノカバネハゴトニ
則簸出川變血而流其骸者每
キダミナナリイカツチニトビヲドリテノボリソラニキカレキリタマフ
段悉化雷飛躍而昇天矣故切
ソノナカノヲヲトキニミハカシノハスコレカケキ
其中尾出時御刀出刃少缺矣
スナチカモホシアヤシトテモチテミハカシノサキサシサキテ
爾思怪而以御刀出鋒刺割而

見出則别有都牟刈出大刀故
ミソナハシシカバコトニアリツムガリノタチカレ
取此太刀而思異物而安置御
トラレコノタチヲテオモホシアヤシキモノゾトテヲサメオキミ
許而齋出矣天藜雲劔是也蓋
モトニテイツキタマヒキアメノムラクモノタチコレナリケダシ
其遠呂智出居所出上常有雲
ソノヲロチノスメルトコロノウヘニツネニアリシク
氣故名歟故斷給遠呂智劔出
モユエニナツクルカカレタチタマヘルヲロチヲタチノ

ナライフヲロチノアラタマト
號謂大蛇出鹿玉。亦云天羽羽

天^{アミノ}蠅^{ハヘ}斫^{キリ}出^ノ劍^{タチト}。亦^{マタ}云^{イフ}
大^ヲ蛇^{チノ}韓^{カラ}鋤^{スキ}出^ノ劍^{タチト}。此劍者今在

石上也。

隨教言設備而待之時。隨教言也。專足名推手名推神小係
也。設備而待也。兼て須佐之男命も係ま也。其故也。信如
言とは。須佐之男命此御心ふて云まむあり。○信如言來
は。嚮ふ老夫。今其可來時と云し如く來ま由れ也。師云

書紀よむ。至期果有大蛇云々と云て。此処よて。大蛇の形
状を云れむ。此も蛇の形状乃言し如くお也と云ふ意も
あもる。○勅遠呂智曰。汝者可畏神也。上伊邪那岐命
告桃曰。汝如助吾云々とある類ふて。切ある事は當りて
は。何ふまれ。物言かくゆま。古も今も有ゆ事お也。欽明
天皇卷よ。秦大津父と云人の狼よ。汝者貴神云々と云ひ。
膳臣巴提便と云人此虎よ。汝者威神云々と云ゆあぞ成
思ふはし。○敢て伊加傳と訓はし。阿倍氏を訓む。○嚮を
既よ上ふ註す也。第四亦二段新嘗。○八甕酒。前段の一口
酒槽を。比登久智能佐加夫禰を訓て。實を甕を云ふゆと
みむ。は。甕を和名抄ふ。亦作瓮。和名毛太非と見え。新撰

字鏡。甕瓮とも彌加と訓み、瓮字を書紀に、瓮此云倍
や有まむ。毛太非彌加。倍や名を變れども同物あり。今
み大あるをバ加米と云ひ、小くて口のたぶ
も彌加とも。毛太非やも訓はれまど。山城風土記に、釀ハ
腹酒やも有れば、此を本。ハ甕酒や訓るも従ふ。此
を波良と云。實の名は非祢とも。口小き中張ふ。一
人此腹に似とまばあり。今時も土中を。上代の瓦器を
掘出るとを。其形を圖集とるを見る。一
口は、ほも多うれど、真中。大ある口は、ほよ。小壺に如く。
小丸。口は、付多る。ほと同心。程丸。口の五付とほも

有き。いおきも底圓くて。直に居れど。傾き轉ぶ物ある故
に。古書ども此器を置ことを。穿居とは云。穿居。伊波比倍を穿居
おど居や多く詠る。此由。丸。伊波比倍と云。こやハ黒田宮。卷り注
みを見。段の一口酒槽を。比登都能佐加夫禰と訓。案。お槽を云
牙。見む。船。お腹と云。あや。仲哀天皇。卷。船。腹不
乾。と。ほ。船。腹は。兩旁。と。下。水。お没る處を云。牙。れ。ど。甕
を借字。おて。船を數ふる。よ。幾腹と云。へ。と。見。ほ。べ。し。○
每口沃入。大蛇。が。ハ。口。お。せ。丸。め。○。每船垂入頭而
云。は。八頭を各。ハ。腹の船。垂入。て。飲。付。し。丸。也。○
多礼氏と訓べし。總て蛇を甚く酒を好む物ある。況て
口おせよ。沃入を給。し。く。ば。か。く。飲。付。る。年。を。案。然。ほ。お。と

〇留伏寢矣。は已ぐ本此住處牙は歸らで。酒を飲と依
處ふ留めて醉伏し寢と依由也。〇御佩之十拳劔の事
は下よ注せし。〇切散を師云伎理波布理と訓べし。水垣
宮段了。斬波布理其軍士と有ふ依まゆ。委くを彼処よ云
斬と。〇變血を師云知邇那理氏と訓せし。仁徳天皇紀六
十七年。笠臣祖縣守ぐ備中因川鳴川の派あは。大虬を斬
まゐる處ふ。河水變血と見えぬ也。變をかへ又と訓はか
色のうを。〇其骸者云く昇天矣。こを舊事紀よ扱まは。〇
紀ふも私記曰師說此蛇斬爲八段即每段成雷總爲八雷
飛躍昇天是神異之甚也とあり。傍の古書了遺れる。伊加
を採まはれらむ。

豆智とを。何ふまれ嚴く剛き物を云ふと。上よ注す也。
第十六段。第十八。此の雷を。天子昇れ也。有哉思ふ。決
免了龍ほぞ有ふむ。其は和名抄。龍。和名。文字集略云。能
幽明大小登天。四足五采甚有神靈者也とあり。此文ふ角
書落せりと見ゆ。其下。文ふ。同じ文字集畧を引て。蛇。龍
之無。角青色也。螭。龍之無。角赤色也。と有を見て。漢因よて
直ふ龍と云ふを。角あ。然れど皇因ふては。舊て蛇の類
を云ふを。知べし。あ依る。角はと四足の有無ふ拘をら。或を幽れ。或を明
ま。大蛇くも小はくも變化て。雲を起し。天小昇也。雨まよ
氷を降し。飢ど委依物を。今も多都と稱ふ。龍の天子昇る
を死也。必鳴神あり。そを雷神の佐く依態あるを。人々然

依細し死事までは知さ依故ふ。雷鳴をやぐて。龍の態と
思ふも有免也。但し斯むか加也。猛く靈ある物ふを有まむ。
此が地ふ在と地を。大きくも小けくも。蛇の形ふ依故ふ。
倍美とも蛇やも云ふ。斯て此ある雷。やぐて龍れらむと
思ひ合さ依く事は。靈異記ふ。雄略天皇。空ふ雷れ鳴るを。
小子部。栖輕ふ。請奉れと詔。牙まば。栖輕馬よ乘て。空ふ向
ひ。天皇れ勅あ也や呼を也て追ふふ。雷侘て落と依を捕
牙て進れる事何也。栖輕が雷を捕牙する事を。日本紀よ
也。委く雄略天皇。其雷の形を。日本紀よは大蛇と何也。
卷ふ注。依を見ん。然れむ此傳ふ。雷化く有也。其
想合せて辨ふ依し。昇る時よいみじく鳴。動きあはしけ

む故も有ばき。遠呂智が甚く怒也て死なむ。靈の碎れ
て。かく數の龍と化て昇らむ。然も有べき事ふあそ。
○中尾と也。師云八尾あま。端ある中れ依有也。鍊胤
詠卅一年。沙弥道祥が手写。本と云ふ也。切。○御刀は。即右
中尾時云くと訓て有也。と聞く聞えと也。○御刀は。即右
此十拳劔也。○刃少缺矣。は。尾中ふ劔あ依故ふ。其も觸
て刃の缺あるあ也。○都牟刈之大刀。師云刈を伎と訓る
は。由あし。都牟賀理とは。物を利く。截斷貌を云。言ふて。今
世語よ。豆加理ま。須加理あ。と云ふ。即是あ也。大神宮神
寶ふ。須我流横刀と云。何依を。式ま。儀式帳。須我利劔也
も云牙也。は。と式ふ。出雲。因出雲郡よ。都我利神社と云あ
也。是等も同言ふ。今云。此社の祭神を。神名式考證ふ。出
雲。臣譜ふ。伊佐我。命れ子よ。津狩。命と

云あり。是あら。ちて都流岐と云も。此都牟賀理此約也。
むとい。牙ゆ。岐と約り。あまむ。都牟賀理之大刀也。劔之大刀。
依名。牟賀理と流と通ふ。あまむ。都牟賀理之大刀也。劔之大刀。
や云ふ同じ。其説紛々。あまむ。都牟賀理之大刀也。劔之大刀。
川を尖。巴と依。意と云れ。ぐら。ま。と。川。を。葉。草。薙。お。ど。も。刀。の。利。き。を。
て。物。を。川。断。意。あ。巴。を。云。ま。と。依。を。い。か。今。思。ふ。よ。尖。巴。
この意。よ。を。あら。じ。ま。と。大。葉。川。の。木。草。の。葉。を。川。断。を。云。ふ。
云。依。名。あ。ま。む。と。大。葉。川。の。木。草。の。葉。を。川。断。を。云。ふ。
依。名。あ。ま。む。と。大。葉。川。の。木。草。の。葉。を。川。断。を。云。ふ。
貌。字。云。言。れ。ま。む。川。は。借。字。あ。巴。此。巴。き。と。能。せ。ば。又。
ひ。思。ふ。し。今。云。師。は。如。く。云。ま。あ。る。も。然。る。言。あ。ま。む。と。混。
格。を。異。あ。れ。と。加。理。や。云。む。何。れ。も。物。を。截。断。意。あ。れ。む。
未。は。同。じ。語。お。落。る。あ。り。さ。て。尖。ま。依。意。お。非。ざ。る。は。師。説。
此。如。大。刀。は。加。茂。翁。の。考。ふ。断。此。意。よ。て。名。け。ぬ。巴。や。云。む。
あ。ま。む。が。如。し。物。を。断。具。れ。ま。む。あ。巴。今。云。下。文。よ。断。給。遠。呂。

説をも。ちて古書ふ。多知をも都流岐とも。あむ同物字。
見。説。し。ちて古書ふ。多知をも都流岐とも。あむ同物字。
通はし。云。子。巴。都流岐を云。言。あ。ま。む。正。々。ハ。都流岐能多知。
と云。を。畧。き。て。都流岐とのみ。も。云。あり。然。れ。む。精。し。く。分。
て。云。と。死。ハ。多。知。を。あ。べ。て。此。名。都流岐を。其。用。を。稱。と。依。
名。あ。ま。む。と。字。も。劔。を。も。太。刀。と。も。刀。を。毋。横。刀。と。も。通。む。し。
書。て。差。別。あ。し。然。る。を。和。名。抄。ふ。四。色。字。苑。云。似。劔。而。一。刃。
岐。と。云。ふ。漢。國。の。さ。あ。巴。此。巴。依。て。劔。を。ば。う。あ。ら。び。
都。流。岐。と。訓。み。多。知。を。必。太。刀。と。書。ふ。と。心。得。る。を。後。
世。の。あ。や。あり。さ。て。師。の。古。此。を。皆。諸。刃。あ。巴。片。刃。も。小。
後。此。物。ぞ。と。云。れ。し。を。信。お。然。こ。を。あ。り。但。し。上。代。も。小。
刀。も。片。刃。あ。る。も。有。於。と。お。む。し。き。事。あり。王。垣。朝。段。も。
紐。小。刀。と。依。を。必。比。毛。賀。多。那。と。訓。べ。き。あ。巴。書。紀。了。も。
ヒ。首。を。書。て。然。と。免。巴。其。の。加。多。那。て。ふ。名。を。片。刃。片。刃。も。
ろ。の。義。と。聞。也。然。れ。む。上。代。も。小。刀。了。ハ。片。刃。あ。る。も。有。
て。其。字。加。多。那。と。ハ。云。し。あ。る。べ。し。和。名。抄。ふ。も。太。刀。和。名。
太。知。小。刀。加。太。奈。ま。と。刻。鏤。具。小。も。刀。子。賀。太。奈。と。あ。巴。然。

依を片刃あるが便とき故ふいおとなく後また大刀を
も凡て片刃不依事よそあまりなり天智天皇紀三年
大氏之氏上賜大刀小氏之氏上賜小刀とあり此等の小
刀七諸刃ありしり片刃ありしり知のとしはと武烈天
皇紀の哥ふ飲衰陀擲とあるハ大○思異物而云く有は
刀此中より大あるを云ふ依べし
じ死物の尾よか依劍の有しうは異物と思しれむ
案然と死也鍊ふて作る劍の蛇の抑おを大蛇の尾
躰中より有べき理あり
ふ含み持と依事此異死を思ふよ彼袁呂智を高麗神此
末あるばき事既ふ云が如く依を總て鐵は人も知ぶ
ぞく蛇の身よ毒と爲すと類れき物依がまと蛇此鐵
よ害の依事も類なく彼を切ある刀は荒れはてて再用
ふ依耐交其趣を思ふよ鐵の性を悉蛇の體ふ混入る

故ふ彼が身を害ひ刀は其性を失ひて腐れあま依と見
えぬ也信友説よ西戎の漢高祖と云る王が白蛇を切と
り云劍を始死皇國よも蛇切丸おと云て蛇を
切とる大刀をやおとあ死物よ死依を然ばのり鍊を
書ふ蛇をさ牙切とる刀れよ害をれ交と云義よて珍
重みけるあらむ然依ふ彼遠呂智の然ばう也靈異れ
と云依を然れ也
神劍を尾ふ含死て持ぬ依を案よ小縁此物よを非交ま
ぬ彼劍の神異ある事も然ばか也大蛇大蛇の身内ふ含
まれ少くも害はれ交て神異を著し天羽々斬之劍此刃
をさ牙ふ缺と依を最も忌ふしれど云まくも更あ也此
大
刀を遠呂智の尾よを如何して含持とめとちて此大刀
云ふと考あり第七十九段よ注ふを見べし

字得給ふと忽ふ天照大御神ふ奉也給牙也とある傳と

も。凡て誤あす。久しく御許に齋持給へるあ。孫子天葺
根神を遣して。上奉給子るもて知れし。委くは第七十九
云、るを。○天藜雲劍是也云く。藜を牟羅と訓べし。村
見と。はる久毛と訓ばし。靈き太刀を合持あすし。祥ふとす
て。居所の上ふ。異し死雲の常ふ立らむ。冥然も有はき
事あすかし。師云。此太刀此事始ふ伊邪那岐大神の迦具
土神を斬給ひし。御刀に著る血の成まる極速日神。斐伊
郷に住給ひて。其斐伊川上ふして。今かく大蛇を斬給ひ
て。其川血は變て流ると云ひ。其尾中をす。はと此靈劍を
得給子るあ。と。此彼溪苑由縁あるのれ。諸まぬ彼極速日
神と。同く成坐る。

建御雷神の御太刀石上は鎮坐せむ。此の須佐之男
命は御太刀此同く石上は坐し。もま。と由縁有る。○斷
は多知と訓ばし。舊く伎理と訓さる。あま劍を多知とい
ふ語の本あす。○大蛇之麿玉とは。荒魂の義あす。其を此
劍もて。遠呂智を斬給子る。須佐之男命は荒御魂の功
徳あまむれす。○天羽く斬之劍。○天蠅斫之劍。古は二劍
此名義いまだ考得ぬ。○大蛇韓鋤之劍を纂疏云。韓鋤猶
言犁也。劍形類犁故曰也。今本はカラサヒと訓され
る。和名抄農耕具。小廣韻云。犁墾田器也。和名加ま。と釋名
云。鋤去穢助苗也。和名須岐。まも。○在石上。古語拾遺に
とも。大和国の地名也。和名抄に大和国山辺郡師云。在
石上伊曾乃加美とあり。

石上を書紀一書ふ。在吉備神部許とも有る。備前国赤坂郡石上布都之魂神社是ありと云す。案一、通り也。誰も然思ふるれど。熟思す。然ふ非也。其故をばしも名高き倭を依をお死て。吉備を依を直し石上とは云てむや。若吉備のれらば。かあらば吉備石上あやぐ。あぢ云はけき。然きむあや。倭此石上あるはし。はて推度いそ。崇矢田部遠祖武諸隅を御使として出雲大神宮に藏れる神宝を召上て見よ。まふ事あり。矢田部造を。姓氏録ふ。る。物部氏の別を。正さて。垂仁天皇紀。二十六年。物部十千根大連。詔して。出雲の神宝を。檢校せし。仍て神宝を。掌らしむ。まは。八十七年。此文。同人石上の神宝を。掌ること見也。然れむ。此須佐之男命の御劍。出雲神宮に藏ま。正しを。右の崇神天皇。垂仁天皇。此御時。あど。餘の神宝と共。あ。京に。召上。さまひて。其時と。正や。石上。うを。納ら

れより。む此石上。うハ。あ布種。くの神宝を。納られし。あ。と。垂仁天皇。紀。見え。と。正。は。て。後。よ。所以。正。て。備前。国。牙。遷。奉。し。あ。る。は。し。其。時。倭。の。本。宮。此。名。を。取。て。彼。を。も。石。上。布。都。御。魂。神。社。と。を。申。あ。ら。む。い。う。ま。ま。ま。石。上。布。都。魂。と。云。名。を。必。倭。の。と。正。出。と。る。こ。と。明。き。字。や。か。く。ま。バ。書。紀。ま。と。拾。遺。よ。在。石。上。と。云。は。初。倭。よ。坐。し。時。の。傳。牙。在。吉。備。と。云。る。を。遷。正。給。ひ。て。後。此。傳。説。あ。る。べ。し。然。る。よ。備。前。の。石。上。社。傳。説。ふ。を。神。劍。を。昔。大。倭。の。石。上。牙。遷。し。奉。て。此。社。よ。を。坐。ま。さ。び。と。云。へ。り。い。か。有。ら。む。ま。と。此。劍。在。吉。備。と。あ。ゆ。ふ。お。き。て。須。佐。之。男。命。の。蛇。を。斬。給。ひ。し。も。案。を。備。前。国。あ。正。故。よ。簸。川。と。い。ふ。も。備。前。よ。正。出。雲。此。斐。川。ふ。を。非。也。と。い。ふ。説。も。あ。ま。ど。信。ら。れ。ど。

カレコ、ヲモテソノハヤスサノヲノミコトミヤベキ

故是以其速須佐出男命宮可

ツクルトコロヲマギタマロイツモノクニニテイタリマシス

造出地。求給出雲国。而到坐須

賀地而詔出。吾來此地而我御

心須賀須賀斯也。詔而於其地

作宮而坐矣。故其地者於今云

須賀也。茲大神初作須賀宮出

時自其地雲立騰矣。爾歌曰夜

久毛多都伊豆毛夜幣賀伎都

麻碁微爾夜幣賀伎都久流曾

能夜幣賀伎袁亦造御室而所

宿出處云御室山爾喚其足名

推手名推神而勅汝等任我兒

宮出首而於二柱神賜稻田宮

主神云號矣又レノカミトイフナラキ亦云稻田宮主須マタイフイナダノミヤヌシ

稻田宮主篁イナダノミヤヌシ故以其櫛名田比カレモテソノクシナダヒ

賣メラ亦云稻田マタイナダ於久美度起而令ニクミドオコシテシメ

產出神名八島士奴美神其奇ウマタヘルカミノミナハヤシマジヌミノカミソノクシ

稻田美等與麻奴良比賣命將イナダミヒトアタハスヌラヒメノミコトムトシ

產出時求將產出處而來坐熊ミコウタフトキニマギムウミサトコロヲテキマシクマ

谷鄉而甚久麻久麻志枳谷在タニノサトニテイトクマダグマシキタニナリト

詔出故其地云熊谷也ノリタマヒキカレソコヲイフクマタニト

是以とは奇稻田比賣を得給へる事を承て云、宮造の事係と也。○宮可造之地師云宮を御宅ありコラモテ宮字を造

ある意ふ けて此宮造を。全奇稻田比賣御合坐む料を
見出し。 然後行覓將婚之處と何依。即此の文子當る哉
也。書紀子。然後行覓將婚之處と何依。即此の文子當る哉
もて知法し。凡て上代了。婚禮はるふを。先其屋を造りし
事也。彼伊邪那岐伊邪那美大神の御時よも。○須賀地
御紀ふ。遂に出雲之清地焉と有て。清此云素鵝と注せ也。
○我御心須賀須賀斯師云書紀よ。吾心清淨之を何ゆ。此
言此意は。濯く斯伎也。云々をを。く。く。しきと云。云。さ
ぞかしきと云。云。同格の語。お。お。ひ。あ。也。○源氏物語也ど
お。須賀須賀と云。言多し。そ。ま。ハ。滞。れ。く。速。よ。事。の。行。を。云。
ま。む。此。を。本。と。云。別。意。う。ま。と。垢。奈。丸。清。き。と。滞。る。こ。せ
あ。き。と。似。と。ま。ば。本。を。一。意。の。れ。不。此。事。を。明。宮。段。よ。須。久
須。久。登。せ。云。言。の。今。此。地。ふ。來。坐。於。れ。ば。御。心。ち。此。洗。濯
也。よ。委。く。云。て。む。

ある如く。潔く所思給ふ也。今世の言ふ。心の清と云ふ
同じ。出雲風土記。安來郷神須佐乃命。天避立廻坐來
坐此處而吾御心者安平成詔故云安來也。とあるを合せ
見と。今云此事。既よ第六處を異を。事。れ。さ。る。全
同きを以て。古傳此意を準へて知法し。安平成も。心の落
著意れまむ。心の清と云。同じ也。然。此。時。の。自。所。思。御
心。ち。を。云。る。俗。よ。い。ふ。心。持。也。記。全。身。御。心。に。善。惡
の。け。だ。り。を。非。然。る。を。穢。惡。心。性。に。て。清。淨。善。心。に。變。化
給ふ。意。と。は。る。を。精。う。ら。ぬ。説。也。凡。多。漢。意。不。濁。を。と。る
学者。此。僻。を。去。て。や。も。れ。れ。む。万。の。事。を。儒。佛。の。心。法。を
説。あ。さ。む。と。去。ゆ。ら。此。の。御。言。あ。ど。多。執。子。今。大。蛇。を。斬
て。心。に。祓。除。お。せ。云。れ。る。を。痛。く。強。言。あり。今。大。蛇。を。斬
て。無。上。靈。劍。を。得。給。へ。依。此。功。比。類。あ。き。お。因。て。自。ら。御。心

ち清く志く成て所思免ひあるべし。蛇を殺して民の害
功と成るを當らば其の功も非じをや。此神の御 ちて來此
地を其地ふ係て云、泳む。此地ふまと渡き所以あはれし。
其を凡心うは測の多し。抑、此地を奇稻田比賣子御婚
る功績を立給ふは、始免此地を御子孫天下にお大
て御心は、志く所思むも宜しきなりける。○作
宮而坐矣。師云、おれ坐字を。上此到坐は坐とは異ふして。
住居あるふと云意おれむ。麻く志く氣流を訓はし。上の
を住居あり。下の麻志は崇辭あり。さて下は祁流と云こ
を添ふるを語れ勢おとまり。其を祁理と云、はして祁
流としも云こと。は上の其地を曾許爾那母を訓はる。那母
の結辭は凡て文章を如此上下相應ふ辭の格を依る。母
とお依を後世人は文章ハこ乱て辭のくさばを知らざる
人委べてあし、近きころ文章よちこる人阿まど猶これ

を知らぬ。○於今云須賀也。師云、此地を。出雲風土記を細小考
依り、はち大原郡須我山郡家、東北一十九里一百八十步。
須我小川源出須我山と見え。同郡ふ須我社も見ゆ。ま
ゑ意宇郡野代川源出郡家、正南一十八里須我山とある。
此須我山も。即右の大原郡あるを云ふ。須我山を大原
ありて、其、ちて同郡熊野山郡家、正南一十八里。所謂熊野
大神之社坐と見ゆ。かゝる須我山熊野山を相並はる
處おまむ。共、郡家、正南十八里。熊野神宮ぞ。即此須賀宮處
れり。故思ふよ。久麻野を隱野の義おして。今云、久麻
を通ふこと。第三段。御歌詞此都麻碁微の由お依はし。
よ注せ依らぶとし。

或説み須賀宮地を、出雲郡出雲郷にして、式子出雲神社
とあり是ありと云有り、伊豆毛夜幣賀伎と云御詞あり
れ、信お此説も由あり、非、然、ま、ど、も、風、土、記、み、現、子
山川社、れ、ど、の、名、み、須、我、と、見、え、ま、と、熊、野、御、社、あ、ど、彼、此
を、思、ふ、は、猶、上、れ、考、お、依、る、べ、し、は、ぬ、杵、築、大、社、の、あ、り、
よ、今、其、趾、と、云、処、ま、と、八、雲、山、あ、ど、云、あ、る、を、後、世、れ、作、事
お、ち、て、此、神、宮、は、式、子、意、宇、郡、熊、野、坐、神、社、大神、を、何、依、是
れ、也。今、云、お、ち、此、御、社、の、事、を、第、一、茲、大、神、師、云、あ、り、小、始、
て、大、神、と、申、せ、也。下、皆、同、じ、伊、那、那、岐、命、を、も、夜、見、圍、段、の
や、あ、依、ち、て、此、を、熊、野、宮、お、坐、ま、は、處、を、指、て、申、せ、る、也。
若、然、ら、ば、を、更、免、て、茲、於、今、云、須、賀、と、云、て、其、須、賀、宮、お、坐
大、神、と、云、べ、き、よ、非、交、於、今、云、須、賀、と、云、て、其、須、賀、宮、お、坐
茲、大、神、を、云、意、た、の、お、ら、顯、あ、也。須、賀、と、熊、野、を、も、本
よ、ち、その、須、賀、て、ふ、名、を、近、き、こ、り、の、山、川、お、れ、こ、也、熊
野、て、ふ、名、を、神、宮、お、れ、こ、り、て、遂、お、別、あ、る、が、如、く、あ、ま、る

り。○初作を。師云都久理波自米給と訓ても有ぬ法なれ
ぞ。茲大神とは。此宮お坐とあろを後と云て。是を立返
て。其初を云あまむ。初字を別お波自米と訓法し。○雲立
騰矣師云是は。此地お宮造也婚坐て吉うるべき瑞也
ち。はと何の雲とも無れぬ。あ尋常は雲おて。何とれ
く立しふて有むうし。古今集序小注み。八色の雲お立
て云へは。○歌曰を。宇多比多麻波久と訓法し。宇多とい
ふ語の由は既お云牙ゆ也。第六段の。○夜久毛多都は。荒
木田久老云。彌組立也。古事記お。倭建命の御歌よ。夜
都米佐須。伊豆毛多祁流と見え。万葉三卷よ。入麻呂歌お

は。八雲刺出雲子等と何まば。夜都米も夜久毛も同言ぞ
と云子ぞ。雲と云體言を。都米と云ては。雲ぞとは誰う心
得む。まと續紀よ。八裳刺曲せ何るをも。併せて考ふるよ。お
れ久毛は組の用言ふて。涙をむ角ぐむ芽ぐむれどの久
牟ふ同じく。聚に催は意と聞ゆまむ。雲といふ名も。それ
る名。彌組立れ意は。と其を都米とも云は。詰ふて。今此
言よも。雲の扱むと云。是あり。八裳を何依も彌詰あり。然
れども。出雲ふか。依發語とれみ見るは。し。ちて刺と
立せは同意れ言よ。今言ふも。さし曇とも立曇をも
云子。後撰集歌ふ。いよし子。野中の清水見るからふ。

刺くむ物を涙ありなり。や有もて。おれ刺と云言を按ふ
ば。今云記傳よ。夜久毛多都を。彌雲起よて。彼雲の立騰
幾重も立曇あり。意ぞと言ま。おる。○伊豆毛夜幣賀伎師
云伊豆毛は出雲子。伊傳久毛の傳久を約て。豆とれま
依あり。此を固名ふ。非。夜幣賀伎を彌重垣ふて。
幾重も何依を云ふ。但し此。案此垣を云。は非。八重
雲の立出るを。垣とを云。成給するれ。雲霧を彼方此方
を隔。依あ。垣ふ似と。上の夜久毛の夜を承て。此夜
云。お。此。契。沖法師。加茂翁。翁。どの説を論ハれ。とるを。
其。を。洩。し。於。さ。て。久。老。云。武。烈。天。皇。紀。了。も。ね。不。き。み。れ。八
重。の。く。み。垣。と。あ。り。て。垣。ふ。も。組。と。い。ひ。雲。も。組。む。物。あ。れ
む。か。と。由。有。て。聞。ゆ。く。み。垣。も。こ。も。垣。あ。る。べ。し。

けりて此御歌詞と起て。因名を出雲と負也。八雲立と云言も其枕詞とあるあり。○今云此御詞ふとて。因名と為まる事。第七十六段の末に見えと也。○都麻基微爾也。夫妻隠ふて。夫婦隠る料ふと云意あり。凡て都麻とは。夫と對へて妻を云れみあらば。妻と對へる夫をも云稱て。夫婦の間を互ふ云子也。俗に都礼阿比此を夫婦をか糸て云る也。さて微字書紀に味とあり。基微を基母理の約め。基味を基母良世の約也。此句を妻を共と云意に見て。稻田比賣を諸ちて夫婦隠共。宮造り給ふを云と云。説をうあむべ。ちて夫婦隠と云例也。上久美度の解ふ云るの如し。今云この師説を注せる。○夜幣賀伎都久流也。師云彌重垣造ふて。此も

家此垣を云り非也。彼雲の垣を成と云こを也。久老云加ふ免る義あまむ。雲字垣と也。あし雲の立出るを造。依と宣ひしれ。今も船人の言ふ西子雲此作也。云。風吹ぬ。ほしあど云り造ると。○曾能夜幣賀伎袁師云。曾能は其あ也。都麻基微爾の句を承て云ふ。儲かく二度上。詞を返して云也。古歌此常あり中頃と也。此格ありを返して今世の俗に謡歌も常多し。是歌謡の自然也。勢ふ多。折返せむ。其情深くあ依事ぞかし。終此袁は。只助辭もて。余と云むが如し。此格多し。下ふ云べし。袁作ると上。あら。ちて一首也。意をちら糸て云は。今吾須賀宮を造る時しも。八重雲の起也。此立出る雲。八重垣を成せ也。吾夫

妻隱らむ此宮此料ふ。雲も八重垣を作るまやと。と歌ひ
給子依れ。凡て雲のうす此みを云り。然依り妻を隠む
給て看む。ひ知らむ。明のあらむ。此餘此義何依まやれし。
後世も神道此輩此御哥ふくさく。の言痛き説を
おけ。或を秘事おとまや。あま云何ふ。終まど。凡て古
字あら。燃。説。れ。ま。だ。論。ふ。も。足。ら。び。ま。と。稻。田。姫。の。答。
哥とて有も。古。躰。子。何。ら。び。後。世。の。作。事。ぞ。は。と。此。御。哥。子。
あ。布。袁。呂。智。の。事。を。い。ひ。て。八。重。垣。造。る。を。警。戒。○亦造御
の意ぞれといふも。けら。子。由。あ。き。こ。と。れ。り。

室而云く。風土記ふ。大原郡御室山。郡家。東北一十九里一
百八十歩。云くと見也。あ。の。云。く。と。約。と。依。を。即。室。は。和。名
抄。ふ。無。呂。と。何。也。年。呂。を。寝。屋。ふ。を。依。詞。と。思。は。け。て。此。御
室は須賀宮の事ふて。彼宮を造らあ。時。小。宿。正。給。子。依

傳ふ。依。べ。し。内。山。眞。龍。が。解。も。然。云。ひ。師。も。須。我。山。も。此
とありて。相。近。き。処。あ。ま。だ。須。賀。宮。此。あ。此。山。を。風。土。記。抄
を。如。此。傳。子。と。る。う。と。言。れ。と。正。き。○爾。喚。云。く。師。云。あ。此。喚
ふ。在。海。津。郷。飛。石。村。山。名。を。何。れ。○爾。喚。云。く。師。云。あ。此。喚
を。米。志。氏。と。訓。て。下。此。任。字。を。ば。多。禮。と。訓。し。其。由。を。次
子。云。○首。を。師。云。都。加。佐。と。訓。る。も。誤。ふ。を。非。祢。を。あ。布。意
毘。登。と。訓。し。大。人。の。意。あ。也。今。云。諸。氏。の。加。婆。泥。了。首。と
説。を。委。く。第。三。十。九。け。て。此。首。は。後。世。の。宮。く。春。宮。等。此。
長。官。此。如。く。あ。る。殘。云。れ。也。○任。を。多。禮。を。訓。し。由。は。凡
多。理。と。云。辞。ふ。二。何。り。登。阿。理。と。氏。阿。理。と。此。約。ま。正。と。る
あり。此。を。そ。此。登。阿。理。の。約。れ。る。多。理。を。仰。ま。る。言。あ。る。故
ふ。多。禮。と。訓。あり。多。ま。於。此。字。は。拜。某。官。此。拜。と。同。く。余。佐
礼。を。即。登。阿。礼。れ。り。

須と麻氣賜と米須也。三の訓ある中。余佐須は此小叶
をび。ま。と麻氣賜也。も訓はうらび。麻氣を京と也。他國の
うらせを約免て麻氣と云あり。万葉小此言多し。みあ
蹴の官よありて。行こせ。み云。牙。心。を付て見。は
は。と。史記。南越傳。天子罷參也。とあり。此訓。み。て。一。ケ。は
一。カラ。せ。ある。事を。悟る。べし。然る。を。京。官。の。任。を。も。麻。氣
と。訓。む。を。み。ど。米。須。と。訓。ぞ。此。は。叶。牙。依。米。須。を。其。人。を。召
來て。其。官。を。授。くる。意。ふ。て。司。召。を。云。是。を。也。顯。宗。天。皇。紀
古。天。皇。紀。任。僧。正。僧。都。天。武。天。皇。紀。拜。造。高。市。大。寺。司
お。ど。あり。凡。て。上。代。に。本。居。お。在。る。人。を。京。に。召。て。官。に
を。任。給。牙。ゆ。し。故。に。召。と。云。し。其。名。目。を。後。ま。で。も。遺。れ。り
古。今。集。雜。部。の。詞。書。に。も。ろ。こ。し。の。判。官。に。免。さ。ま。て。云。く
と。あ。る。を。異。國。に。遣。は。さ。ま。け。ら。れ。て。と。有。べ。き。を。免
され。て。と。有。を。違。牙。る。に。似。と。ま。せ。も。彼。時。代。に。既。く。麻。氣
と。云。名。目。ハ。絶。て。凡。て。米。須。と。云。せ。し。お。也。縣。召。と。云。も。此
小。同。じ。ま。と。い。は。ゆ。依。任。大。臣。を。後。撰。集。榮。花。物。語。お。ぎ。よ。

大臣召と有るを古意よと加くまば同任字も其官ふと
て。皇國の言は異な依ぞのし。諸此を。上小喚と何依の。
此意ふ當る故ふ。此任字は多禮と訓はきお也。○賜云く
云號矣。須佐之男大神の。此名を賜ふれり。○稻田宮主神。
師云稻田也。須賀地比舊名あるは。故稻田宮とも云ル
む。内山氏云。稻田也。今仁多郡横
田郷の里名とあれりと云也。加くまむ。稻田比賣也云
は。此小宮造也。御婚坐るを也。此名を依はきを。父の初
子名告れ依は。後名を廻して。語傳へあるお也。主を首と
同意お也。須賀を。此了てを。既小地名れ也。其故は。さ死小
吾御心須く賀く斯。と詔牙る此みよてを。此神名よ負せ

給ふはでを有はじれを。八耳を。借嚴都美く。伊
加都と云名の例。まかま有れを。伊切。夜は足
撫耳を約。と依名あらむ。阿志那を切。耳は尊稱ある
と。上小委く云依が如し。今云此師説。第三十三。若足
撫耳の意。れらむ。足名推。云と同じ。貴の須。佐之男。命比
姪。よ。給ひて。稱。予。し。名。あらむ。や。上。よ。云。る。を。思。ひ。合。は
ば。し。然。る。字。入。耳。の。文。字。は。就。て。口。訣。了。聞。八。方。稱。と。云。ふ
申。せ。る。例。を。引。も。縁。か。き。漫。言。あり。ま。と。聖。徳。大。子。を。八。耳。と。申。せ。し。や。さ。る。古
事。記。よ。も。書。紀。よ。も。當。ら。び。彼。太。子。を。八。耳。と。申。せ。し。や。さ。る。御
名。あり。と。も。彼。を。豊。聰。耳。と。申。す。本。小。棹。乃。八。乃。耳。云。く
と。云。を。引。も。心。得。交。此。言。式。よ。載。る。の。あ。す。狹。ハ。須。佐。て。ふ。地
ゆ。り。牙。八。乃。耳。と。云。は。き。由。ら。め。や。箒。狭。ハ。須。佐。て。ふ。地

名。飯石郡。小も有れど。此を其ふ。何ら。須。賀。を。切。て。須
佐と云。る。れ。ま。む。即。須。賀。や。同。じ。上。須。賀。須。賀。斯。と。云。依
を。思。ひ。合。せ。と。○今云。杵築。大。社。記。よ。八。重。垣。神。主。佐。草。氏
を。足。名。推。神。の。後。あり。○又云。佐。久。佐。社。八。重。垣。明。神。也。能
義。郡。佐。久。佐。郷。に。坐。り。本。社。に。稻。田。姫。素。盞。鳥。命。大。己。貴。命
を。合。せ。祭。る。左。右。に。社。ハ。手。摩。乳。脚。摩。乳。を。祭。る。當。社。の。神
主。佐。草。氏。媒。氏。と。も。書。○於。久。美。度。起。而。上。小。出。と。忍。考
巴。稻。田。宮。主。後。也。を。ぞ。○
合。云。は。し。傳。見。べ。し。○今。産。之。は。宇。麻。斯。米。給。閉。流。と。訓。は
し。此。を。本。所。生。と。有。れ。出。雲。風。土。記。よ。娶。奴。奈。宜。波。比
る。も。依。て。記。改。産。於。其。と。生。を。始。餘。の。古。書。よ。も。例。多。く
も。常。お。ま。ど。令。産。と。云。う。と。理。正。く。通。也。れ。を。云。○八。嶋
士。奴。美。神。名。意。は。師。云。士。は。知。奴。を。主。美。は。稱。名。耳。比。略。ふ
て。上。小。云。牙。る。例。の。如。し。今云。此。師。説。を。第。三。十。四。段。の。傳
忍。穗。耳。命。の。処。よ。注。せ。る。を。見。ん。

けりて此御名也。後小大國主神。因造て天下をうきはき
坐依時よ。遠祖お依故よ。如此稱子しよや。若然らばを八
嶋知主とは云はじくこそ。○奇稻田美等與麻奴良比賣
命。此のみをクレイナダと訓てやハ。名意。奇稻田之上。本よ久志伊奈太と書とまをる也。
注子也。美等與内山眞龍説よ。如此訓て。古事記よ。八土
比賣者。如先期美刀阿多波志都雄畧天皇紀よ。與之夜而
娠おど有を引多依よ依ま也。此を前ふて美等与と訓て。御豊の意ありや云ひ本よ。久志伊奈太美等与麻奴良比賣と書て。悉く假字あるを。與字のみ訓を用ふはくも非安を思へ也。此の字もろりき故改。麻奴良は眞寐もて。眞處與は眞小寐るといふ。災也。
意の名お依はし。眞龍也。足名推神。此須佐之男命也。吾名は云く。妻名を云く。女名を奇稻田比賣

と告とれど。眞告あり。奴と乃と通ふと云へれど。いあ
あらむ。まよ万葉十六よはしとて。の熊來酒屋よ眞奴良
畧奴和之。さびひ立云くとある。眞奴良畧も同言あらむ
の畧解よ。まを發語ぬら依む所罵ありと注り。考ふべし。
○將産之時は美古宇麻牟登斯給布時爾を訓み。將産之
處也。宇美麻佐牟處と訓はし。○熊谷郷也。出雲風土記よ。
飯石郡熊谷郷。郡家東北二十六里云くと見也。和名抄也。諸本とも
よ。飯石郡熊石と誤まり。内山氏解よ。熊谷は斐伊川の西岸。上下は熊
谷を合せて。一郷と依之云也。○久麻久麻志。枳谷在は。隱
かふて。御子生給ふよ。甚宜き處と求得給へ依事を歡び
坐る御言れ也。在字を那理を訓むを常お也。諸神名式よ。
山城国相樂郡小綺原坐健伊那太比賣神社と云也。此

此比賣命を祀まはる社あり
此は比賣命を祀まはる社あり。然れど其記れる由縁を今知べらるべし。
 此比賣命を祀まはる社あり。然れど其記れる由縁を今知べらるべし。

茲速須佐出男大神出御子都

留支日子命此神出此處耶吾

敷坐山口處也詔出地於今云

山口亦子圀忍別命此神出吾

敷坐地者圀形宜也詔出處云

方結亦子磐坂日子命此神出

圀巡坐出時到坐惠曇郷而此

處者。因雅美好。因形如畫。鞞哉。

吾宮者。將造此處云矣。故云惠。

曇亦子。衝杵等乎雷。比古命。此

神出。因巡坐出時。到坐多太鄉。

而吾御心者。明正眞成焉。吾將

靜坐此處云。而靜坐矣。故云多。

太亦子。青幡佐草。日古命。此神。

於高麻山上。蒔初麻矣。故云高。

麻山於此山上。其御魂坐也。又

此神出坐處云。大草也。

此段と次段とは全く出雲風土記の傳を採集して記せ
也。○都留支日子命名意劔子由あはべしとを思子ど其
由いまど見當らば。内山眞龍を須佐之男命天よて誓坐
子とるくと云れど然を思われば八束水臣津野命天葺
根神と申ひ二柱の名ハ正に藪雲劔子由ありて負坐る
名あるを思ふ此神も彼劔子由ありて負坐る
由ありて此名を負給子る。○敷坐とを地をうしは
死坐を云。祝詞ふ敷坐固敷坐嶋あぞは依是也。○山口
を。山北上^{ホリナチ}口をいふ語也。風土記ふ嶋根郡山口郷郡
家正南四里二百九十八歩とあり。同記抄ふ山口郷東川
村也と。はと此條ふ布自^フ積^ジ美^キ高^タ山^タ郡家正南七里二百一
十歩高二百七十丈周一十里とあは山北口を云と内山

眞龍を云子也。同記抄ふ此山跨山口朝酌まと此條ふ布
自伎彌社といふ也。餘戸則東川津嵩也とあり。まと此條ふ布
此頂ふ在やぞ。都留支日子命を祭れるふを非ざはる。風
記抄ふ合祭布自^フ積^ジ美^キ多^タ氣^キ二^ニ社^ツ。○固忍^{クニノレ}別^{ワケ}命^{ノミコト}名^ナ意^イ忍^ニは^ハ大^{オホ}
於山頂今俗云嵩大神とあり。○固忍別命名意忍は大
別を師説の如く吾君兄の約れ依ふて建^{タケ}き^キ義^{ヨシ}の名也。
此は既ふ隱岐固此亦名忍許呂別の處了注へ也。まと別
同言あらむの考を淡路穗之狹別此神武天皇卷ふ石
処に注へり共第八段の傳見るべし。神武天皇卷ふ石
押別と云人名もあり也。○宜を延斯と訓はし。宜を延と云
は古語の常あり。○方結^{カタユビ}は^ハ宜^{ヨシ}を^ヲ詔^{ミコトノコト}子^コる^ル延^{ノビ}て^テふ^ノ語^ヲを^シ訛^シ也
也。由比也云子依故ふ舊く結字を書るむ。然らでを此字
を書べき由也

し、本よ、方結今依、前用と云ひ、然るも今は返りて、加多延
和名抄ふも、方結を書とす。其下よ引く、鈔よ、方結、片
を呼ふとぞ。江浦也と有、もて知べし。けて風土記了。嶋
根、郡方結、郷郡家、正東二十里八十歩と見え。其鈔よ、片江
浦也。加僧都玉江七類、浦爲一郷を、同郡よ、方結社と
云も風土記ふ見也。方結社を、鈔よ、片江浦、伊比都加、
坂日子命、名義字の如くあゆり。坂を借字ふて、榮の義う。
思ひ定が、若くは天津磐境ふ由あるう。其の第百三
子よ、磐坂皇子と申、有て、此を大和、圀の地名よ依る
御名と通也ま、ま、此神名ハ、其地名よ依れりとも所思
え。○圀巡之時とを、圀くを作、堅、巡見給ふ由あゆり
を。須佐之男、命此、天壁立極廻坐と、ある處ふ既了注す。

第六十五段 惠曇郷を、秋鹿郡あす。風土記よ、惠曇郷、郡
の傳見べし。同記の鈔よ、江角古浦武代本
家、東北九里三十歩と見也。郷也、蓋意佐田、宮村、可亦以入
此、郷と。○圀稚を、久邇伊志久と訓はし。神代紀一書、圀
あり。○伊志久は、宇比志久了。宇比志久、伊初
を訓るよ依れり。伊志久は、宇比志久了。宇比志久、伊初
初志死由、初し死を稚き意をもて、此字を書くと見
也。古事記の初発ある、圀稚を、師をク。○美好を、二字ふて。
宇流波志久と訓べし。○畫鞞鞞を、上ふ出で、委く注す。
第三十二段 畫を、惠と云は、繪字の音、伊と師、説も有れ
の傳見べし。畫を、惠と云は、繪字の音、伊と師、説も有れ
ど、舊を、此古語あるあ、此御言ふ依て、知られぬ。文
書、こと、舊を、有り、人形造るあ、とあ、いと、然まど
古く有し、う、む、画を書く、こ、ざもあ、ざ、無らむ。

惠てふ言此義在末考得交。鍊胤云。こを後古史本辞は
る畫鞞とあるは神世小畫多依鞞の製何也て其不如と
依由亦依依し。江次第あどみ。鞞繪と云ふと有て常よを
繪あり。画鞞は画字書と。○惠曇を風土記に。本字惠伴と
る鞞れ。混ふべうらば。○同郷小惠杼毛社と云も何也。抄
見え。和名抄よを。惠曇と。同郷小惠杼毛社と云も何也。抄
惠曇。郷中朝日山七社中也と見。此等よ依て訓法し。杼毛
也。磐坂日子命を祭るれ依べし。○衝杵等乎留比古命。杵
字を書とるを。ドニの音此韻を。○衝杵等乎留比古命。杵
モ。子轉用ふ依あり。と師説あり。○衝杵等乎留比古命。杵
字あり。衝杵杖杵小て等乎は。折竹之登遠く登遠く此
登遠と同く撓む義あるは。留之万葉二卷小奈用竹乃
騰遠依子少連と依余流の余を省れ依語よて。因作也巡

見給ふよ。杖給へ依杵此撓むむ加也。長き由をもて稱乎
と依御名ある。九十六段ふ注乎。天嗣杵命八尋鋒長
依日子命と申は神。はと若くは杖杵の徹ると係と依御
名をも思合也。し。はと若くは杖杵の徹ると係と依御
名。徹をトホルあまむ。仮字違へ也と疑ふも有べし。れ
むうし。ま。と式ふ。陸奥。因磐瀨郡。小杵衝神社と云あり。何
ある神。ま。と式ふ。陸奥。因磐瀨郡。小杵衝神社と云あり。何
云。古。老。傳。云。昔。素。佐。鳥。等。御。子。衝。杵。等。乎。而。留。比。古。命。巡
行。此。因。詔。吾。御。躰。衰。坐。詔。而。靜。坐。故。云。於。止。利。今。謂。大。鳥。者
訛也。と。何。る。云。出。雲。風。土。記。を。学。び。作。れ。る。漫。説。あり。乎。留
の。間。よ。彼。風。土。記。も。而。字。錯。り。て。入。ま。る。を。右。文。其。誤。字
さへ。と。其。ま。入。り。し。○多太郷。同記。小秋鹿郡。多太郷。郡
た。い。と。嗚。呼。あり。り。し。○多太郷。同記。小秋鹿郡。多太郷。郡
家。西北。五里。一百二十步。と。何。也。和名抄よも。秋鹿郡。多大
岡本。大垣。二村也。今岡本。与。○因巡。上。小云。乎。依。如。く。因
秋鹿村之塚也。とい。乎。り。○因巡。上。小云。乎。依。如。く。因

作、巡見給ふれ也。○明正眞成焉は、阿加久多陀斯久成奴
也訓。本子を師ハ志ハ訓れとり。前小須佐之男命此安
來、郷小渡來坐して吾御心者安平成焉と詔ひ須賀地小
到坐て我御心須く賀く斯と詔するも同心。○静坐と云。
他小知られ安隱めて顯れ給えぬを云。委くは第百二十
長隱鎮坐に外。同郷小多太社といふが二社あり此神此
鎮坐る處あるべし。抄云、多太兩神を多太郷岡本村。○青
幡佐草日古命。佐草をまと佐久。名意青幡を青島佐草は
麻草此阿を省け依りて畠小麻を蒔初給へ依由の御名
也聞也。幡を借字あり依りて佐と眞は通ふ佐りて佐草と
は麻を稱する語にも有べし眞龍を青幡を冠辞

あり万葉集に青幡之忍坂山まと青幡木幡とも連けと
依を思ふ。佐久左の佐を發語まて青幡の如く靡く草
と連々しあり草を多き中に萱をささ云へり然れど此は故事のあははは。○高麻山を多加
佐山と訓はし高小阿の韻有れれ也。高天原あど本小
大原郡高麻山郡家正北一十里二百歩高一百丈周五里。
北方有檉椿等類東南西三方竝野と見也。抄は在八代郷
塚山と。○蒔初麻矣云く此御国の地小麻を蒔と依初を
也。其を高天原は大御神此岩屋に幽居せる時は長白
羽命の種給予まと葦原中囿に種さすらば此神の
今初給て種給へはれ也。其を須佐之男命五十猛神此種
拵て降給へる何はまま種の源を高天原より出る事
こを疑ふ然る是はと豊宇氣神の徳を生れる事

た、違、無れ、ちて麻を時とる高山ある故ふ。高麻山とを負
ばあり。○於此山上其御魂坐也。本子矢代社を云ふ也。
此を鈔ふ。坐屋代郷三代村高麻山。青幡佐草日子命也。俗
云、高塚大明神也と云ふ也。○此神之坐處と云。現世に坐
ませぬ間住居處を云ふ也。○大草也。本に意宇郡大草
郷。郡家南西二里一百二十歩と見え。和名抄にも意宇郡
大草と見ゆ。風土
記抄に大草、日吉、岩坂、大庭、佐草、四村也とあり。眞竜云、佐
草日子命坐の故に地名に負とまは、舊に佐草と云ふ也。
を郷と成し時ふ大草同郡に佐久佐社を載とす。此に神
名式ふも、意宇郡に佐久佐神社と載られとす。今も佐草
村と云ふ坐とす。鈔に見ゆ。此社に固史に仁壽元年九月
乙酉、青幡佐草壯丁命授、從五

位下、まゝと貞觀七年十月廿八日、出雲、固左草神、授、從五位
上、はと元慶二年三月三日、出雲、固正五位下、青幡佐草壯
丁神、正五位上、ちて都留支日子命とす。佐草日古命、まで
おど見えとす。ちて都留支日子命とす。佐草日古命、まで
五柱神、ち、誰も風土記にふる。須佐乃乎命、御子と有す
て。御母の名を傳むらび、を其有し事をも。或は固巡坐
之と云ひ。或は徒に此處ぞ云く。此處を云く、れぞ詔へ依
由にみ記し傳へて。固作堅給ふとは言ひまども、自然に
其事やれく。固巡と云く、想像して。作堅給ふの趣に
ひ、死て通ゆるは、古書の傳に、いと朴畧に、妙なる物に
ぞ有る也。お、此神等此みあらび、固作り固給へる、斯
神をいと多うり、次くみ注ふを見る、は、斯て
此神等を始、次く此神等も、固作巡に給へ依事を、悉く

須佐之男大神の神御計を正けぬ。其由下ふ委く注ふ。第九十一段の傳
見るべし。

茲健速須佐出男大神以佐世
木葉爲頭刺而踊躍出時所刺
出佐世木葉出墮出地云佐世
亦至坐須佐鄉而此囹者雖小

囹囹處也故吾名者不著木石
詔而即鎮置己命出御魂而定
給大須佐田小須佐田矣故云
須佐即有正倉亦詔朝御餼勤
養夕御餼勤養五贄組出處而

サダメタマロレトコロライフアサクミノサトトゾ
定給出處云朝酌郷也。

佐世木契冲云。此を鳥草樹サレブキふや。和名抄ワナヒよ。楊氏漢語抄云。鳥草樹和名佐之夫サレブキ乃紀ノキ。辨色立ハナシと見え。字鏡ジキョウふも。鳥草樹左之夫サレブキまマと檜ヒノキ左世夫サレブキともトモのノ也。今山里人イマノヤマノヒトをヲはせぶの木を云ヲ。杓シヤクふ似て小丸コマル窠ソあり。熟マクまマむ。紫ムラサキの黒クロみとトはハやうよて。童コドモれどは取て食ふとぞ。杓シヤクを和名抄ワナヒよ。比佐加木ヒサカキと云ヲ。木キを云ヲ。牙キバめ。記傳キデンふ。仁徳天皇ニトクノミコ此御歌コノミカふ。佐斯夫サスブ能紀ノキと云ヲ。木キともトモ志シやヤくクぶブ此木コノキともトモ云ヲ。倭姫命ヤマトヒメノミコト世記ヨシふ。佐木サキともトモ志シやヤくクぶブ此木コノキともトモ云ヲ。倭姫命ヤマトヒメノミコト世記ヨシふ。佐

佐牟乃木枝サモノキエとのノはハも是シうウ。をヲのノ也。真竜マコノリも此コノ説セよ依ヨて遠トホ此コノ木キの葉ハをヲ春ハルきて其汁ミヅをもて衣イをヲ染シるヲ。茜セキ此コノ色イロ此コノ如トシ古事記コトヰ此コノ歌ウタよ。曾米紀ソノミキ賀斯流カスル迹ト斯米許スミコ呂母ロモとトあり。曾米紀ソノミキをヲ即ツさサしシぶブの木キよヨて遠江人トホノヒトのいイふフそソのノ木キなり。と云ヲへヘ。○大社オホヤシロ記キふ。大社オホヤシロ此コノ末社スエヤシロは佐サくク布フ社ヤシロをヲ云ヲ有アて。其本地ミコトノチをヲ知チらラば白石シラヒシより西ニ十餘町トウふ。○頭刺カミバシをヲ加邪斯カサスありアリをヲ見ミゆユ。此コノよヨ由ユありアリうウ考カウふフべベしシ。○頭刺カミバシをヲ加邪斯カサスをヲ訓ツばバしシ。和名抄ワナヒふ。簪カサス和名ワナヒ加無左カムサ之ノをヲのノ也。髪挿カミバシの義イミふて。頭カミの飾カサスをヲ伊邪那岐イサナギ大神オホカミの黒御鬘クロミカ天宇受賣命アマノウケウメノミコト此コノ日ヒ蔭カサス髪カミおオど有アもモ云ヲ。もモて行イくクば頭カミ此コノ飾カサスふて。頭刺カミバシも同ドウじジ。梅ウメ櫻柳ウツギヤナギ桂カエデ葵アオイ榊カエデ。そソれレ餘ヨもモ何ナニふフても頭カミよ挿サはハるル。皆みな頭刺カミバシと知チばしシ。乳チ本チ景行キョウコウ天皇テウ卷マク倭建命ヤマトタケノミコト此コノ御哥ミカふ久麻加志クマカシ賀波カハ。袁宇受尔ウツケル佐勢サセとトあり。処トコロよ注ツふフ師シ説セ字ジ見ミるルべベしシ。○踊躍ウツクシ之ノ時トキをヲ本チよヨて踊躍ウツクシ為ナリ。万葉十九卷マンヤクニジュウクふ。楯野爾タテノニ左乎騰サハヒト。

流雉ルキシとあるよ依て。袁杼理斯多麻布時爾ヲドリスレタマフトキニと訓ばし。字書
ふ。踊音勇躍音藥。跳也進也。跳舞貌ハシおぞ有て。心のいと清スガ
淨スガレ。手伸タヌレく覺サトも依時セふ爲ら依レ態ハシふて。舞マヒを舞マヒふマヒは。
心を牙別ハシある物ぞ。其を舞マヒを。嬉ウレシきマヒも悲カレ死シふも舞マヒるマヒ
我ワレ踊マヒは悲ウレシき事コト此コト有アてハ。得エ爲レられ終ハシ態ハシあハシ。人情オノミををマヒ
く思オモひ通トし。須佐之男スサノヲノヲ大神オホカミ前マよを荒御魂アラミタマの進スサびて。忌イミ志シ
て辨ワカふマヒ。須佐之男スサノヲノヲ大神オホカミ前マよを荒御魂アラミタマの進スサびて。忌イミ志シ
死シ枉マヒ事コトども起タし給タマふマヒを。解除ハハラの驗シふとマヒて御心ミココロ和ナみ。
清スガくしく成坐ナリる故ユふ。其勇イサみマヒれ餘マヒゆマヒ。踊マヒをも爲マヒ給タマへ依レ
事コトと知シられマヒるマヒ。○佐世木葉之墮サセキハチノオ之地ノチ云フ佐世サセ踊マヒを手テを
伸ノボし足アシを舉タげ。頭カビを振マヒり飛走トビすマヒも依レる態ハシあ依レ故ユふ。頭刺カビ

此木葉の墮オあるれマヒ。風土記フツキふ。大原郡佐世郷郡家正東
九里二百歩と見ミ也マヒ。和名抄ワナマシも。大原郡オホハラノの同郡ドウノ。佐世社
もマヒ。上ウヘ佐世サセ下シモ佐世サセ大谷飯田オホタニイヒ養加等ヤカト五所イツソ也マヒとあり。神
名式ナマシキふ。大原郡オホハラノふ佐世サセ神社シラとある是コト也マヒ。○須佐郷スサノノを風
土記フツキふ。飯石郡イヒシノ須佐郷スサノノ郡家正西一十九里と見ミ也マヒ。和名抄ワナマシ
も。飯石郡イヒシノの郷名ノ須佐スサノとあり。朝野群載アサノノ六ムふ。出雲国イセノ言
上ウヘ管ミ飯石郡イヒシノ須佐スサノ御牧ミカ也マヒ有アれ。古コくを牧カも有アし。おマヒ。風
土記フツキ抄マシふ。以ヨ宮内ミヤノ為ナ郷標ノ併ヒ朝原アサノ反部原サネノ田入タノ間マ竹尾タケノ穴見アナミ
等ト為ナ須佐スサノ郷ノとあり。真竜マコノ云フ須佐スサノ郷ノを神門カミカド郡ノ隣ナリる山口ヤマケ。
伊秩イサキ乙ニ立タ牙カ通トふ路ミチあり。まマと多タ。○此国コノクニと云フ。須佐郷スサノノを詔ミコト
詔ミコトの郡家ノへも通ト多タと云フへ。○此国コノクニと云フ。須佐郷スサノノを詔ミコト
牙カ也マヒ。今イマ世セふ里リと云フ。ばり也マヒ。此地コノチ字ジも古コくを国クニやぞ云フけ依レ。
此例コノタガヒ今イマ數タビふ依レり暇イダあらマヒび。○雖小国スサノノは。佐波伎国サハキノ那禮杼ナレシ

母と訓べし。佐波伎を勢婆伎と云ふ同じ古言ふて。少し
舊く聞えと云。神代紀。少小あぢの字。今本もせバキヤ
物簾之狭物あど。所狭と同言あり。大國小國。○國處也や
國と云こを有まぜ。其小國を少異あ也。○國處也や
は。小地^{サキトヨ}を有れど。最好國^{ヨキクニ}あ也と。稱給^{イハ}予は御語あ也。今
の語も好と云こやを言はで。徒木也。○吾名者不著^セ
國也あど云て。稱る意も聞ゆる語多し。○吾名者不著^セ
木石也。木石を書ゆを漢文あ。吾^{オハ}グ御名を。石木の類。
由れき物^{モノ}予を負^{オハ}せ。御田の名も負せて。後世も遺し給
むむと詔^{ミコトノコト}予るふて。謂^{イハ}ゆは御名代の事此起まは原あ也。
御名代の事。仁徳天皇。卷^{マキ}も委^{オマカ}く注^{ツケ}ふべし。○鎮置^{チンシ}已命^{イミコト}之御魂^{ミタマ}也。須佐地^{スサノチ}も祠^{ヒコ}
を建て。鎮置^{チンシ}給^{イハ}予る由あ也。次^{ツギ}も有^ア正倉^{テイクラ}と。所は即是あ也。

あち其^{オホ}下^カ。自身^{ミミカラ}は魂^{タマ}を記^{ツキ}れる例^{タトヘ}あ。ふ始^{ハジ}めて見えとゆ。
よ注^{ツケ}べし。○大須佐田小須佐田。あち大神御^{オホカミミコト}自^ミは御名^{ミナ}を負^{オハ}せて。定^サ
給^{イハ}予る御田^{ミコノチ}あ也。大小^{オホコト}は。大國^{オホクニ}小國^{コクニ}大忌^{オホイミ}小忌^{コイミ}あど云。大小^{オホコト}
をち異^ヒりて。稱^{イハ}辭^{ハコト}の大小^{オホコト}と通^ツえあ也。然^{シカ}るに。國^{クニ}も大小^{オホコト}と
は。正^{ただ}も大小^{オホコト}此^こ由^{よし}あるを。此^こ抑^{おさ}田^チは。稻種^{イネタネ}を殖^ウる所^{ところ}ふし多^{おほ}。
大小^{オホコト}をち聞^きざむをれ也。抑^{おさ}田^チは。稻種^{イネタネ}を殖^ウる所^{ところ}ふし多^{おほ}。
其種^{そのたね}はも。豐宇氣^{トヨウキ}神^{カミ}は御身^{ミミ}ふ。始^{ハジ}めて成^{なり}出^いと。依^よ物^{モノ}もあふ。
此^こ大神^{オホカミ}前^{まへ}も荒御魂^{アラミタマ}の進^{すす}び給^{たま}へ也。し程^{ほど}も。痛^{いた}く嫌^{きら}ひ給^{たま}ひ
て。岩屋戸^{イハヤド}段^{たぐ}の枉事^{マカシ}は爲^な出^い給^{たま}予^{たま}ゆを。彼^か解^と除^{はら}ふとゆて。
御心^{ミココロ}直^{ただ}也。彼^か神^{カミ}は御身^{ミミ}ふ成^{なり}ま^まる種^{たね}ども持^も下^{くだ}り給^{たま}予^{たま}は中^{ちゆう}
ふ。此^こをも持^も下^{くだ}り給^{たま}ひ^ひるむを。今^{いま}かく御田^{ミコノチ}を定^さめて。殖^ウ付^{つけ}け。

其田ツケ子其御名を負て。御名代とさす爲給子依あ也。○正倉ホク久羅クラと訓べし。即ナホク祠ミヤの義ミヤ也。令コト子正倉と云こせ有て。義解ミヤ正倉者正税ミヤとあるを以て。此ミヤ字も彼ミヤと同じおと。思ふ人も有れど。然らば。出雲風土記ミヤあるは。凡て祠ミヤの事を見ゆて。通え。或正税ミヤの倉ミヤ也。然むり。彼ミヤ固ミヤ多ミヤるべき由ミヤあく。殊ミヤ子有ミヤ社ミヤと云べき所ミヤのみ。即有正倉ミヤとあ依ミヤ此ミヤ。即ミヤ字ミヤをミヤも思ミヤ合ミヤせてミヤ。神ミヤ宮ミヤを保久羅ミヤと云し例ミヤ也。垂仁天皇ミヤ紀ミヤ。五ミヤ十瓊敷命ミヤ。その妹大ミヤ中ミヤ姫命ミヤ。石上ミヤ神宮ミヤの奉仕ミヤを讓ミヤ也。給ミヤひし處ミヤ。大ミヤ中ミヤ姫命ミヤ辭ミヤ曰ミヤ吾ミヤ手ミヤ弱ミヤ女ミヤ人ミヤ也。何能ミヤ登ミヤ天ミヤ神ミヤ庫ミヤ耶ミヤ。五十瓊敷命ミヤ曰ミヤ神ミヤ庫ミヤ雖ミヤ高ミヤ我能ミヤ爲ミヤ神ミヤ庫ミヤ造ミヤ梯ミヤ。豈煩ミヤ登ミヤ庫ミヤ乎ミヤ。故ミヤ諺ミヤ曰ミヤ天ミヤ神ミヤ之ミヤ神ミヤ庫ミヤ隨ミヤ樹ミヤ梯ミヤ之ミヤ。此ミヤ其ミヤ緣ミヤ也。神ミヤ庫ミヤ此ミヤ云ミヤ保久羅ミヤ也。此ミヤの正倉ミヤ也。お此ミヤ神庫ミヤ字ミヤの類ミヤおのけ依ミヤ。義訓ミヤの文字ミヤと知る

ばし。富久羅ミヤ也。久羅ミヤ子富ミヤ此ミヤ添ミヤりミヤさミヤるミヤ語ミヤまミヤ洞ミヤを富羅ミヤと云ミヤハ富久羅ミヤの久ミヤ此ミヤ省ミヤうミヤ也。依ミヤ語ミヤあるべく。思ミヤ也。富ミヤを含ミヤまりミヤさミヤるミヤ義ミヤ久羅ミヤを隠ミヤうミヤあることミヤ也。○津ミヤ、ちて固ミヤ菴原ミヤ郡ミヤお保久良ミヤ神ミヤ社ミヤと云ミヤあり。いミヤうミヤ也。依ミヤ神ミヤ子ミヤ也。ちて此ミヤ正倉ミヤは。風土記ミヤお同郡ミヤ子須佐ミヤ社ミヤと依ミヤ即ミヤ是ミヤ也。須佐ミヤ郷宮ミヤ内村ミヤ子ミヤ在ミヤて。大宮ミヤ大明神ミヤと云ミヤふ。お須ミヤ佐ミヤ神名式ミヤお。飯石ミヤ郡ミヤ佐能袁ミヤ命ミヤ社ミヤありと。風土記ミヤ抄ミヤ子見ミヤ也。神ミヤ名式ミヤお。飯石ミヤ郡ミヤ子。須佐ミヤ神ミヤ社ミヤ也。載ミヤされミヤと也。○朝御ミヤ餼ミヤ勤ミヤ養ミヤ夕ミヤ御ミヤ餼ミヤ勤ミヤ養ミヤ也。朝ミヤ美ミヤ祁ミヤ能ミヤ加ミヤ牟ミヤ加ミヤ比ミヤ夕ミヤ美ミヤ祁ミヤ能ミヤ加ミヤ牟ミヤ加ミヤ比ミヤと訓ミヤべし。朝ミヤ夕ミヤは。茂翁ミヤの訓ミヤ子ミヤとまり。アサミヤは。アサミヤの約ミヤまりミヤあり。此ミヤ詞ミヤ也。祈ミヤ年ミヤ祭ミヤ子ミヤ。水ミヤ分ミヤ神ミヤ等ミヤお白ミヤひミヤ祝ミヤ詞ミヤ子ミヤ。皇ミヤ御ミヤ孫ミヤ命ミヤ能ミヤ。朝ミヤ御ミヤ食ミヤ夕ミヤ御ミヤ食ミヤ能ミヤ加ミヤ牟ミヤ加ミヤ比ミヤ云ミヤくミヤ也。あると。此ミヤ也。此ミヤみミヤあ也。祝ミヤ詞ミヤ考ミヤ子ミヤ。是ミヤ朝ミヤ夕ミヤ御ミヤ食ミヤ料ミヤの神ミヤ類ミヤと云ミヤあり。加比ミヤ也。稻穂ミヤの名ミヤ也。師ミヤ説ミヤ子ミヤ。加ミヤ比ミヤ事ミヤ子ミヤもいミヤふミヤ例ミヤ也。と説ミヤきミヤ抄ミヤきミヤと。師ミヤ説ミヤ子ミヤ。加ミヤ

牟加比の加^カ。宇迦之御魂^{ウカノミコタマ}おぞ云。宇加比^{ウカヒ}宇を省^シは^ハ依^ヨり
て食^ケあ^ハ。食も宇氣^{ウキ}の宇を省^シは^ハ依^ヨりて。加^カと氣^ケを^ト一^ツル
也。酒^{サケ}を佐加^{サカ}竹^{タケ}を多加^{タカ}とも云^ク如^ク宇氣^{ウキ}牟加比^{ウカヒ}を^ト万葉^{マンヤク}の
歌^{ウタ}に御食^{ミケ}向^{ムカ}と^ト依^ヨり向^{ムカ}ふて。神^{カミ}の物^{モノ}を^ト手^テ向^{ムカ}せ^テ云^フも同^ナ言^ハ
あ^ハ。牟久流^{ムクニ}と云^フは。令^{スル}向^{ムカ}ら^ズ。奉^{ホウ}依^ヨ方^{カタ}と^ト云^フ詞^{コト}牟加布^{ウカフ}は。
其^シを受^{ウケ}給^{タマ}ふ方^{カタ}と^ト云^フ詞^{コト}おれ^ド加牟加比^{カムカヒ}を^ト食^ケ向^{ムカ}ふて。御
膳^ケお就^{ツキ}給^{タマ}ふを^ト云^フと有^リ也。然^シま^バ此^{コノ}の勤^{カムカヒ}養^{カヒ}は借^カ字^ジよ^テ。勤
字^カ音^ネを用^ヒひ^テ養^{カヒ}を^ト訓^スを用^ヒひ^テる^ルあり。須^ス佐^サ之^ノ男^ヲ大神^{カミ}已^レ命^{ノミコト}此^{コノ}朝^{アサ}御食^{ミケ}夕^{ユフ}御食^{ミケ}
此^{コノ}食^ケ向^{ムカ}云^フく^クを^ト詔^{ミコト}する^ル也^{ナリ}。○五^{イツ}誓^{ニハクミ}組^{ノト}之^ノ處^ト五^{イツ}を^ト嚴^{イツ}の借^カ字^ジ
あ^ハて。神武^{カムヤマト}天皇^{ノミカド}卷^マふ。火^ヒ名^ナ嚴^{イツ}加^カ具^グ雷^{ライ}水^{スイ}名^ナ嚴^{イツ}彌^{イツ}都^ツ波^ハ女^メ。粮^{ライ}名^ナ

嚴^{イツ}宇^ウ加^カ能^ネ女^メ薪^シ名^ナ嚴^{イツ}山^{サン}雷^{ライ}草^{ソウ}名^ナ嚴^{イツ}野^ノ椎^ヅと^トる^ル嚴^{イツ}お同^ナく。清^{キヨ}
明^{アカ}きを^ト云^フ詞^{コト}あ^ハ。誓^{ニハクミ}を^ト新^{ニホ}饗^{カヒ}と^トり轉^クれ^テ依^ヨ詞^{コト}よ^テ食^ケ物^{モノ}の事^{コト}
あ^ハ也。新嘗^{ニホカヒ}の^ノあ^ハと^トハ^ハ第^{ダイ}四^シ十^{ジュウ}二^ニ段^{ダン}の傳^{デン}お注^ツし^シ。誓^{ニハクミ}
世^ヨ某^{ソノ}組^{クミ}組^{クミ}合^{カヒ}あ^ハと^ト云^フ詞^{コト}と^ト同^ナく已^レ命^{ノミコト}此^{コノ}嚴^{イツ}御^ミ誓^{ニハクミ}を^ト掌^シる^ル組^{クミ}
人^{ヒト}の住^ス處^{トコロ}と^ト定^メ給^{タマ}へ^ル由^ユあ^ハる^ル也^{ナリ}。○朝^{アサ}酌^{サカベ}郷^{サト}あ^ハて朝^{アサ}御^ミ饗^{カヒ}
云^フ。組^{クミ}之^ノ處^{トコロ}を^ト詔^{ミコト}す^ル依^ヨ朝^{アサ}と^ト組^{クミ}を^ト取^リて。里^{サト}名^ナと^ト爲^スと^ト依^ヨり
也。和名抄^{ワナヒナカサ}よ^モ此^{コノ}字^ジを^ト書^キと^トり。風土記^{フツチキ}に嶋根^{シマネ}郡^ノ朝^{アサ}酌^{サカベ}郷^{サト}正南^{テイナン}一
十里^{ジュウジリ}八^{ハチ}十^{ジュウ}四^シ步^フ。熊野^{クマノ}大神^{ノミカド}命^{ノミコト}云^フく^クを^ト云^フ也。此^{コノ}故^{コト}事^{コト}を^ト記^シせ^テ也。
同記抄^{ドウキサウ}に朝^{アサ}酌^{サカベ}福^{フク}富^ト大^{ダイ}井^イ大^{ダイ}海^{カイ}埼^{サキ}四^シ村^{ムラ}也。從^{ヨリ}意^イ宇^ウ郡^ノ間^ノ浮^ウ渡^{ワタリ}
福^{フク}富^ト之^ノ村^{ムラ}頭^{カミ}曰^ク朝^{アサ}酌^{サカベ}促^{サセ}戸^ドと^トり。眞^{マコト}竜^{リウ}云^フ郡^ノ家^ノ抄^{サウ}よ^モ相^{サウ}當^{トウ}
本^{ホン}庄^{シヤウ}新^{シン}庄^{シヤウ}之^ノ中^ノ原^ノを^ト云^フれ^ド古^コ今^{イマ}道^{ミチ}同^ナじ^シ。け^テ同^ナ郡^ノ朝^{アサ}酌^{サカベ}
う^ラら^ズ郡^ノ家^ノを^ト本^{ホン}庄^{シヤウ}あ^ハる^ルべ^シと^ト云^フり。



上社同下社と二社あり抄上社記伊弉冉命朝酌郷大

合記伊弉冉命与熊野大神也とい牙正大井大盛四林山崎自松村櫻井

○門人岩崎長世北原信實櫻井光房ら云ふ此の十五れ

卷を櫻木小あらせて松のれぶニホ句は安ニホ依ニホを科野因

伊那郡飯田城の漆小家を依人あり奥村邦秀が母刀自

奥村ふさ大原正敷が母とむ松村きそ櫻井盈壽が祖母

の刀自櫻井ふち三人のねみれ老女の志をいふはあそ

伊弉冉命朝酌郷大森大神也下社同郷多賀大神而

